

第7回 蘇東坡は5月病だったのだらうかと恥ずかしげに語った

——心事しんじ 恐らくは蹉跎おそせんさた

2016年12月20日（火）。

年末が近づいてくると、やらなければと思うことがそれなりに出てくる。大掃除をしないからといって新年がこないわけではないのだから単なる思い込みではない。それでもやはり気を焦らされる。

トバー君の前回分がまだ残っていて、せめてこれくらいは片付けてしまいたいと、大掃除を脇に置いて取り組んでいると、

「今日はね、お歳暮持ってきたんだ。叔父さんには日頃たいへんにお世話になっ

てんからね。たぶん叔父さんがいまいちばんほしがっているはずのものだよ」

イノ君は大きな箱をうやうやしく差し出した。包み紙にたくさんのマトリョーシカ人形が描かれているのを見て、

「ロシアのプーチンさんがこの前きましたから、これはそのときにもらったお土産の横流しってことですか？」

「それが違うんだなあ。あの日はさ、ちょうど仕事だったじゃん。ボクって仕事優先の人じゃないですか。ああいう力強さをやたらとアピールするような人は好きじゃないんで、断るのにいい口実があつて助かったよ」

「じゃあ、イノ君と会っていたからプーチンさんは遅刻したっていうことではなかったんですね。それにしても、お歳暮とはどういう風の吹き回しですか？ この重さからすると、古典的に海苔かなんかですか？ ロシア産の海苔？」

「ロシアとはたぶん関係ないかも」

大きさを割に軽い箱から紙をはがして開けると、

「また箱が出てきました。これもマトリョーシカの絵。ということはこの中身もまた箱ってことでしょうか？」

開けるとその通りで、

「この中もまた箱で、最後はからっぽ、気持ちだけですってこと?」

「ネットで注文すると、大きな段ボール箱にびっくりするくらいちんまり小さくおさまってたりするじゃん。それとおんなじだよ」

次々に箱を開けて、5番目の箱は手のひらに乗るくらいに小さく、

「ああ、もうこれでわかりました。中身はあれでしょう。年末の忙しいときにぴったりです。ほら、やっぱり。ICレコーダー。正月休みにだらだら遊んだりし

ないで、これをやりなさいって、とつても親切なお歳暮ですねえ。うれしいですよ」

「喜んでもらえた？ ボクって、叔父さんのことはちゃんとわかってるもんね」

「で、〇〇にはいつ行ったんですか？」

「ほら、この前、ボーナスが出たよね。それですぐにね。叔父さんももらったよね」

「ああ、もらいましたよ。いつも通りの金一封ってやつで、お札が1枚分だけ」  
「ボクもそんなもんかと思ってたら、正社員っていうのはやっぱちつとは違うんだね。ほかの業界と比べたらぜんぜん少ないけど、〇〇に行くにはまあまあ十分な資金だったんだよ」

「でもなんでわざわざこんな手のこんだことをしたんですか？ マトリョーシカ

の包装紙はどつかで買ってきたのですよね。どういう意味ですか？」

「さあね。説明できるような意味があったりしない方がおもしろいってこともあるんじゃないの？ それよか、中身はそれだけじゃないんですけどお」

「まだなんかありましたか？」

箱を振ると、ぽろりと、

「ああ、サイコロキャラメルだ」

「そつちこそが肝心のお歳暮！ ほら、ずっと前に、サイコロキャラメルの販売が終わっちゃってさびしいみたいなのを言ってたじゃん」

「そうでしたっけ？ へーえ、なんか、なつかしいですねえ。でも、これって絵がちよつと違いますか。北海道の地図が描いてありますよ。そこに北方四島が付いていないのはプーチンさんに気を遣ったってことでしょうか」

「ロシアはもう関係ないから。サイコロキヤラメルは北海道限定で復活したんだつて。北方四島ではたぶん売ってないんだろね。それを叔父さんのためにわざわざ取り寄せたんだ。ボーナスの残りを全部つきこんでね」

「そんなに高価なんですか？」

「そうそう。もうすつからかんになっちゃった。それとね、こんど博打ばくちが解禁になるよね。叔父さんは小説が売れたりする気づかいは100パーないんで、老後のためにこれからはサイコロで稼いだらいいんじゃないかと思って、縁起物だよ」

イノ君はサイコロキヤラメルを手の内におさめ、

「さあ、丁ちようか半はんか！ なんか賭ける？ おじさんのボーナスをつきこんじゃう？」

「IR法案で、いきなり賭博がOKになったわけではないですよ。1円でも賭けたらダメですよ」

「おもてなしの国だから、頭にチョンマゲを乗せた渡世人のおにいさんが、『勝負！』ってツボを伏せるのが、日本らしさをアピールしていいんじゃないかなあって思ってたんだ。国立の渡世人養成大学校をつくって、総長は次郎長さんとかに頼んだらいいかも」

「サイコロより花札の方がよくないですか。日本の季節を描いた美しい札を、小粋なお姉さんが配ったりしたら、外国からのお客さんは喜ぶでしょう」

「博打っていうのはさあ、要するに、胴元が必ずもうかるようになってんだよね。国や自治体が胴元と組んで、外国人からうんと金を巻き上げようっていうのがIR法のもくろみだよ。なんかいやしいよなあ」

「わたしもそう思います」

「トバー君から聞いたんだけど、博打に絶対負けられない方法があるっていうのを

叔父さんは知ってる？」

「知っていたら、いまずぐそのサイコロにボーナスを賭けますよ」

「宋の都に相国寺そうこくじっていう大きなお寺があったんだよね」

「この前だったかトバー君が話していましたよね。宋の都は相国寺の門前町として発達したんですよ。境内にたくさんのお店が出て、浅草の仲見世のように大変にぎやかだったらしいです」

「そこにね、1人の道教の術者が筵ふだを敷いて、おまじないの符をたくさん並べて売ってたんだって。符は紙でくるんであって、『失せ物が見つかる方ほう』とか、『熱が下がる方』とか、『良縁を呼ぶ方』とかいろいろまいことが書いてあったんだ。

ある男が通りかかって、『賭博で負けぬ方』というのが目に入ったんで、『都にきてからこつち何をやってもうまくいかねえ。こうなったら、あれでも買って、一



発当てるしかない』と、符を求めると、『これは靈験あらたかなもの。決して封を開けてはいかんぞ』と術者に言われたんで、大切にふところにおさめて、そそくさと賭場に行き、なけなしの銭で勝負に出たんだ。ところが、もののみごことにすっからかんになってしまった。『なんだい、まったく役に立たないじゃねえか』。怒ってびりびり封を破ると、出てきた符に『但止乞頭』の4文字が書いてあったんだ。叔父さん、その意味わかる?」

「えーと、どう読むのでしょうか。漢文のテストですか?」 『但ただ止や頭やを止やめやよ』。ちがいますね。『但ただ乞こ頭こを止やめるべし』、『但ただ乞こ頭こに止とむべし』かな。『乞頭』のところはわからなくて意味が通じませんね」

『乞頭』っていうのはその筋で使われていた俗語で、ばくちのテラ銭せんのことなんだった。テラ銭っていうのは、ばくちで勝った人がもうけた分から胴元に払う銭

で、昔の中国では10分の1って決まってたんだって。つまり、テラ銭をもらう側になれば、ばくちに負けることはないって、そういう意味なんだって」

「それこそまさにIR法の真髄じゃないですか。国会の先生方は相国寺の術者に教わったことですかねえ」

「じゃあ、ここは叔父さんが胴元になっていいから、このサイコロに何をかける？」  
「このICレコーダーにしますか。わたしが負けたら、ICレコーダーをあげるので、イノ君が文字起こしをするってことでいいでしょうか」

\* \* \*

——**あ**のですね、いきなりこんなこと言うのはないだろうなあとは思っただけど、言いたいのがまんしてるのはつらいし、思っただけを隠せるボクでもないか

ら、一発目に言わしてもらっちゃうと、この前、デビューアルバムっていうのを聞かせてもらったんだけど、なんかストーンとこなかったんだよ。後から思い出して、また聞いてみたいって感じが、悪いけど、あんまししなかったんだ。デビューアルバムっていうと、やっぱ、みずみずしさにはとさせられるっていうか、この先どんなもんが飛び出してくるのか楽しみっていうか、若々しさに嫉妬させられるっていうか、なんかそういうものがあるから、何度も繰り返し聞きたくなるんだろうなあって思うんだ。

原詩では難しい言葉を駆使して、「どうだあ!」「恐れ入りました」みたいなところがあつたのかもしれないけど、「だからなんなのさ?」っていうのもあるし、内容的にも「ふーん、そうなの」っていうだけで、なんか要するにおっさんぽいかなあって感じがしちゃったんだ。それと、もっとヘンだなあって思ったのは、

トバー君は土地の事情を知るために見て歩いたんだよね。名所旧跡みたいなものにウンチクを傾けて、それはそれで「苦労さんって言うことにはなるんだけど、その土地柄ってというか、人々の暮らし向きってというか、そういうのはまるつきり見えてこなくて、これってなんなんだろうなああって思っちゃったんだ。

とくに、この前、『この世界の片隅で』っていう映画を見て、強く感じたんだよ。トバー君はその映画を知ってるかなあ。終わりの方で広島に原爆が投下されるんだけど、原爆の惨禍を直接描くものではないんだ。広島から呉に嫁入りした女性が主人公で、戦争が深刻化するにつれて、その女性が大切するものが一つまた一つと失われていくありさまが描かれているんだよ。タイトルの通り、「世界の片隅」で生きている女性の視線から1ミリも離れることがないんだよ。映画を見てから、いくつもの場面をボクは何度も何度も思い出すんだ。

はつきり言って、トーバー君のデビューアルバムは、残念ながらそういうのがなかったんだよ。メチャクチャ失礼ってことはわかってるんだけど、酔っ払っちゃう前にぜんぶ言わせてもらおうと、トーバー君はどこを見てたのってことだよ。だって、トーバー君は修学旅行の中学生とか、定年過ぎの老人の観光客とかじゃなくて、地方官僚としてその土地に行ったんだから、詠むべき詩の内容が違うんじゃないのかなあって気がするんだ。都への旅の途中で、人々のわびしい暮らしを詠んだような詩があったよね。そっちのほうは「世界の片隅」っぽくてよっぱどよかったと思うよ。古い石ころみたいなものを見て、小難しい詩を詠んで、そんなんでも官僚が務まるんですか、目の付けどころが違いはしませんかって、毒づきたくなるよ。

文化財も大事だよ。だから、それを詠んだ詩があってもぜんぜんかまわないん

だよ。だけど、本筋はそっちじゃないでしょうに。人々の暮らしを詠んだような詩があるんだったら、そっちを聞かせてほしかったよ。ちゃんとしたものがあるんだったら、ボクはいま暴言を吐いたと謝りますよ。どつかの大臣のように誤解を招いたので撤回しますとか、そんなことは言いませんよ。自分の言ったことを撤回してチャラにするなんて、サイテーのバカだよ。ボクは誤解の余地なく自分の考えを伝えたつもりだから、間違っていたらきちんと謝りますよ。その上で、今夜はお酒も魚もいちばん高いものをご馳走するよ。もらったばつかのボーナスを全部使い切ったっていいんだから。

㊦

あなたが「遊たびの奇絶きぜつ」を語る相手になってくれて本当によかったといま改めて

思います。鳳翔ほうしょうに赴任した当初の私の何が一番の問題であったかを、これほど

端的に指摘して下さいた方はこれまでいませんでした。あなたに向かつて実はこういう詩がありますとお聞かせできるものはありません。暴言でも何でもなく、まさしく「どこに目を付けてんのか」ということです。制科の受験勉強に明け暮れ、それに合格し、たぶんその間に私の脳の働きが少々おかしなことになってしまったのでしよう。そのことに私は無自覚で、自信過剰にさえなっていたのです。

身近にはあなたと同じように気づいていた人もいました。その人たちは、私が助言を受け入れるような状態になるまで、しばらくの間じっと待っていてくれたのでした。

——すみませんねえ、いきなりズケズケ言っちゃって。でも、ボクだって、前回から2カ月ほどは待ってたってことなただけど。

で、その人たちってだれだったの？

① 妻と馬正卿ばせいけいです。今夜のうちに話がそこまで行けたらいいのですが、それま

での間は、「どこに目を付けてんのか」と、あなたに叱られそうなが続いであります。

——叱ってほしければそうするよ。この間、どつかの市長が、中高生に向かって、「自分は授業を抜け出してタバコを吸って楽器を弾いたりした。そこが自分の居場所だった」てなことを言ったらしいけど、そういう話って、なんかむかつくんだけだよね。「むかしはぼくちゃんやんちゃだったけど、いまではこんなに偉くなったもんね」と自慢してるだけっていうのが見え見えだもんね。「ぼくちゃんいまは偉い人



なんだけど、むかしはやんちゃだったんで、君たち、ぼくちんのこときつと好きになってくれるよね」って、アピールしてるみたいだし。要するに、自己愛がめちゃクチャ強くて、叱ってほしいっていう姿勢がゼロなんだよ。だから、「どこに目を付けてんのか」ってことがあってもトバー君のほうがましだね。これって、ほめてんだか、けなしてんだかわかんないか。今日のボクってあんまし感じよくないかも。しばらく黙ってんね。

㊦ 官僚になったばかりの私にとって、最初のころは巡りあわせのよいことばかりが続きました。第一が鳳翔府ほうしょうの知事が宋選そうせんだったことです。本性が鹿であり、しかも自信過剰の私に、いわゆるお役所仕事のなことが勤まりそうにないと、あなたもたぶん思われるところでしょう。宋知事はまことにおおらかに見守ってく

ございました。

赴任して最初に、鳳翔周辺の名所を見て歩いて詩を作ったのは宋知事の勧めによるものでした。しかし、だからといって、来る日も来る日も出て歩くなどということは普通はしないでしょう。まさに野に放たれた鹿で、役所の仕事など見向きもしないでその年を終えてしまいました。宋知事は「鳳翔八観」の詩を大層ほめてくださり、さらには、官舎の北側に池を掘ることまで勧めてくださいました。

年が改まって嘉祐7（1062）年となり、さすがの私もぼちぼち役人としての職務をこなすようになりました。お役所仕事というのはとかく書類が幅をきかせるもので、中国の官僚政治は大昔から徹底した文書主義で、そのために漢字が作られたと言って過言ではありません。私は知事の補佐としてたくさんのお文書を裁くのが主な職務となり、知事の名でさまざまな公文書を作成するようになりま

した。私が草稿を書いて知事にお見せすると、毎回褒めてくださり、一文字も直すことなしに正式の文書として使ってくださいました。

2月にはとてもおいしい仕事が割り振られました。おいしい仕事というと、裏金がかつぱりみたいなことを想像するかも知れませんが、金品への欲が薄い私にはその類のことは少しもおいしいものではありませんでした。

この年の初めから、都には水害の報告が相次いでいました。天災が頻発するのは、国に失政があるのを天が咎めるものであるという見方があり、皇帝は、無実の罪で獄中で苦しんでいる者がいないかを調べ、万一そのような者がいたらただちに赦免せよと、全土に命じました。皇帝の詔みことのりが鳳翔府に届いたのが2月9日で、宋知事は、これまでの寛大な政治を一段と推し進めるよい機会であると考え、鳳翔府が管轄する10の県に人を派遣し、獄中にいる囚人をすべて一律に減刑し、

皇帝の恩をあまねく人民に行き渡らせようと思いました。

私は四つの県を担当し、2月13日に出発しました。鳳翔府からそれぞれ90里、40里、100里、200里の距離にある4県を巡って2月19日に帰還しました。かなりの強行日程でしたが、囚人たちが一日でも半日でも早く楽になるようにと努めたのでした。各県には先だって人を派遣して囚人の名簿を用意させ、私は到着するとすぐに一定の基準に従って減刑する命令を書き込み、ただちに囚人に言い渡しました。皆の喜びの声を聞くと、休む間もなく次の県に向かったのです。

——なるほど、それである意味おいしい仕事なのかもね。水戸黄門の印籠じゃないけど、皇帝の詔を取り出して、罪を軽くしてまわるのって、なにかとっても

いい役回りだよね。

㊦ あたかも自分の力で人々を獄中の苦しみから救出したような気分で、意気揚々と鳳翔府に帰りますと、宋知事から大いに褒めていただき、事を終えた満足感にひたりつつ、旅の途中で見聞きしたことを詩に詠んで弟に送りました。それは500字からなる長編の詩で、「鳳翔八観」に次いで、より範圍を広げて各地の名所旧跡について蘊蓄うんちくを傾けて詠んだのでした。その長編詩に盛り込めなかったものを補ういくつかの短い詩も作りました。

それらの詩の内容はというと、やはり、民衆の暮らし向きには目を向けてたものではありませんでした。ごく一部分、蜀の英雄である諸葛孔明しよかつこうめいに関連するところだけをかいつまんでお聞きいただきましょうか。

夕暮れの迫るころに小さな集落に着くと、

あれが諸葛孔明の石鼻城せいびじょうだと聞かされ、

その高みへと登った。

足もとは切り立った絶壁、

その下を奔流が洗い、遠くへと走り去る。

諸葛孔明はここにまで遠征し、

二十日余り戦ったものの退却した。

いまの平和な時代にここで戦を交える国はなく、

道を行く旅人は先を急いでせわしない。

北から来た人はここで初めて険しい山に入り、

南から来た人はここでようやく山から解放される。

山ははるか南の大散関だいさんかんへと連なり、

わが故郷への帰路がそこにある。

行こうとしても行けないのか。

行こうとしなければ行けるのか。

帰るためにはしばらくここに留まらなければならぬのだろう。

道を下り、ぼんやりとした月が浮かぶ夕空のもと、

心に愁いを抱きつつ、ほとぼしる川を渡った。

宿に着き、そして真夜中。

人々が呼ぶ声に驚いて飛び出た。

真赤に燃える火のようなものが虚空に浮かび、

どこに天があるのかわからなかった。

にわかには強い風が吹き、いつまでもおさまらなかつた。

明けて、山がちの道に入ると、

水がさらさらと流れ、川辺に竹が繁り、

これまでと風光が一変した。

——えーと、これはどういう詩？　なんかよくわからなかつたなあ。諸葛孔明からの連想で、故郷に帰りたいて思いがわいてきたってことが主題？　まだ赴任したばかりで、気分よくまわっていたのに、そんなことを思うのってなんかへんじやない？　官僚としての自覚が足りないってことになったりしない？　ボクとしては、それでもいいって思うけどね。それとも、詩としてのカツコをつける味



付けとして望郷の念を入れてみたってこと？ そうなら、インチキくさいってことになるよね。いっけねえ、今夜はすっかり文句たれになってる。

それはそうと、真赤な火ってなんだったの？ 火事？ 寝ぼけて幻覚を見た？ まさかオーロラってことはないよね。

㊦ 詩をそのまま聞いていただくということ、特に説明はしません。

この後にまた一つおいしい仕事がありました。ほかの地域では水害が頻発していても、鳳翔周辺では水不足になりつつありました。前の年からずっと雨らしい雨がなく、このままでは旱魃かんぼつの恐れもあって、宋知事は空を仰いでは毎日嘆息していました。宋知事としては、自分が赴任してから雨がなかったので、天が自分の政治を喜んではないのかと悩ましく思っていたのです。

このようなきに、私に何ができたと思えますか。

——得意の詩で知事をうまく慰めた？ 問題の根本は雨が降らないってことだよ  
ね。人間が地球の気候を変えてしまっているいまだって、明日の天気は自由にな  
らないんだから、できることといったら、神頼み、雨乞いくらしかないのかなあ。

㊦ その通りです。私は四つの県をまわった際に、たいはくせん 太白山という山には雨を降ら  
せる神がいて、しゅうたん 山中にある湫潭という池の水を汲んで祈ると、その水が雨のもと  
になって願いを叶えてくれると、土地の古老から聞いていました。そのことを宋  
知事に話すと、「ご苦勞ながら、私の代わりに神様をお願いしてきてはくれまいか」  
ということになりました。

その場ですぐに神様に捧げるお願いの文章を書いて知事にお見せすると、「これならどのような神様もきつと雨を降らせてくださるに違いない」と、即座に出発ということになりました。

太白山の神に申し上げる。

西方の英偉の気が集まってできたのが太白山だ。太白山の潤いの気が集まってできたのが湫潭だ。湫潭の一杯の水があれば天下を潤すに足る雨になるという。ならば鳳翔の地だけならわけないであろう。

さかのぼること去年の春より鳳翔には雨も雪もない。民衆の生命は何にかかっているのか。麦や稲だ。あと十日も雨がなければ今年は凶作となる。食べるものがなければ民衆は盗賊となるよりない。土地を治める知事だけがそのことを憂う

役務を負っているのではないはずだ。神は座視していてよろしいのか。

皇帝は神に礼を尽し、民衆は神を崇めてきた。それは何のためであったのか。

今日のこのようなときのためではないのか。

神もよくよく考え、皇帝の心に背かず、民衆の望みを断たぬようにすべきであろう。

——ん？ これって神様をお願いしてるってことなの？ なんか偉そうじゃない？ 神様だつてちゃんと考えたら、雨を降らせなければまずいってことくらいわかるでしょうに言ってんだよね。

① 神にたくさんの捧げものをし、平身低頭して祈るのは、いわばお役人になつ

ぶり賄賂を渡して、へこへこお願いするのと同じようなことではありませんか。情実に左右されず、何が正しいかを見極めて事を行うのが宋代したいふの士大夫の流儀でありましたから、神も同じであると考えたまです。何が正しいことであるかの判断ができなくて、正しいことをしない神であるのなら、頭を下げる必要などはないのです。

——強気だね。でも、たしか前に、超常現象みたいなことは信じないみたいなことを言ってたよね。神様が雨を降らせてくれると、本気で思ってた？ それとも、民の上に立つ者として、せめて雨乞いくらいはしておかないとまずいかもってことだった？ 言っちゃなんだけど、さっきの囚人の刑を軽くするっていうのだった、水害対策としてとってもトンチンカンだよ。そもそも災害への備えがない

からそんなことでごまかしたってこと？

㊦ 東日本大震災以降の日本において防災、減災は非常に重要なテーマになっていますが、中国においても遠い古代から防災、減災は国家の担うべき重大な課題として認識されてきました。特に繰り返し大きな氾濫を起す黄河こうがの治水には、歴代の王朝が国家を挙げて取り組んできました。古代の理想の聖天子として堯ぎょうや舜しんがいたということを何度かお話ししました。その舜が黄河の治水に当たらせたのが禹うという人でした。禹は自分の生活など顧みずに治水事業に邁進し、氾濫をおさえ、灌漑によって新たに農地を増やすなど大きな成果を挙げました。舜はそれを高く評価し、自分の血縁ではなかったにもかかわらず禹を後継者としました。天下を治める最大の仕事の一つが治水であるということだったのです。

鳳翔や長安のあたりには黄河の支流が流れていますが、昔から氾濫よりも旱魃の害が起こりやすく、灌漑用の水路を引いたり、溜め池を作ったりと、とりわけ唐の時代にさまざま対策がとられました。しかし、唐の末期から戦乱が度重なり、また真興寺の高閣のような大きな建造物が作られたこともあって、私の詩にも詠んだように山は赤裸になってしまい、土地の保水力が減少して、雨が少しでも降らないとすぐに旱魃の心配をしなければならないということになっていたのです。

歴史をおもしろく描く小説やドラマには、雨や風を自由に操る軍師がしばしば登場し、諸葛孔明がそのような人物として描かれたりもします。そのような術を私は信じるものではなく、そうかと言って、神の存在を否定していたわけでもありません。天や神の名を借りて民衆をあざむくのは許せません。しかし、正しい

天の巡りと正しい政治とは連動すると考えていました。だから、神に正しいことをきちんと知らせる文章を書いて、真心を込めて神に祈ったのです。

太白山で祈願し、鳳翔府に帰還したのが3月7日で、ちょうどその日に待望の雨が降りました。雨の音に宋知事は外に飛び出し、手に雨粒を受け、涙を流して喜びました。

——へーえ、うまいこといったんだ。よかったね。

㊦ いまの科学に照らせば、雨が降ったのはもちろん偶然でしかないのですが、当時の私たちは震えるような感動で天に感謝をしたのです。

しかしながら、雨は半日ほどで終わってしまいました。これではまだまだ心配



だと次の雨を期待していると、3月16日に再びの雨が降りました。これはほんの小雨で、二度の雨も「焼け石に水」ではなからうかと、とても安心できるものではありませんでした。

宋知事は「神は我らの思いを汲み取ってください」と、大掛かりな雨乞いを催すことにしました。私は再び太白山に行き、湫潭からは一杯の水を、峰の上空からは一片の雲を持ち帰って来て、鳳翔で最も高い真興寺の高閣に上って知事と民衆が一緒になって天に祈りました。

物質が作用するには必ずしかるべき時がある。

知事は星を観て、この日と決めて千騎を従えて町を出た。

私はひとり山へと馬を走らせた。

山の神より一杯の水を拝借し、山中の道を取った。

すると、雲が猛然と我が前に下ってきた。

稲光が走るような、あるいは竜が飛ぶような勢いで迫ってきて、  
にわかに散り散りになり、

あるものは野の上の霧となり、

あるものは林の枝につく氷となり、

あるものは私の肘から腿のあたりへとやってきたので、  
それをむんずとつかんで箆の内に収めた。

水と雲とを携えて帰還し、

待ち構えていた知事とともに、高閣に登って雨を祈った。

ここぞというときに、箆の封を切って雲を放った。

もくもくと暗いものが湧き立ち、

空からいましも雨が生じそうになった。

冷やかな風がたもとを吹き上げ、

山へと近づきつつあった西日がかげって光を失った。

「さあ、雲よ、天へとお帰り、

そして、雨を降らせておくれ。

どうか、我が知事がもう心を碎かずにすむように」

きっと今年の秋は豊かな稔りとなる。

雨が落ちて来さえすれば、

民は腹いっぱい米を食べることができる。

——それで、雨は降った？ まさか、そんなにうまくはいかないよね。

㊦ 降ったのです。今度は3日間にわたって降り続き、これだけまとまった雨が降ればもう旱魃の心配はあるまいと、誰もが喜んだのでした。

——へーえ、そいつはすごいや。諸葛孔明も裸足で逃げるトバー君のお手柄ってことだね。おいしい仕事が続いて、めでたしめでたしだ。

㊦ ちょうどこのときに、官舎の北側に掘っていた池ができあがり、折からの雨であふれんばかりの水をたたえるようになりました。

池に臨む小さな亭あずまやが完成すると、「喜雨亭きうてい」と名付けました。「雨を喜ぶ」と

いうことです。そして池のまわりに、桃、李、梨、棗、桜桃、柘榴、樗、槐、松、檜、柳などさまざま種類の木を順次30本ばかり植え、さらに、官舎の北から渡り廊下を出し、その先端に小さな建物を設け、我が部屋からいつでも池を見に行けるようにしました。喜雨亭は池をはさんでその真向かいにありました。

——えーと、「手本は范仲淹」はんちゆうえんってというのがあったよね。人の上に立つお役は、人々の楽しみに後れて楽しむんだよね。雨が降って人々が喜んだので、その後でトパー君は亭の完成を喜んだってことではあるんだろうけど、でも実際の工事は早魘の心配をしているさなかに進んでいたんだよね。自分の楽しみのためにやってきたことが、たまたまタイミングよく完成したってことじゃないの？

ⓧ 今日のアナタのご批判はことごとく当たっています。その喜雨亭の由来を書いた文章があります。

雨を亭あずまやの名に入れるのは喜びを記念するためだ。何かによる喜びがあったときに、そのことをもって物に名を付けるといふのは遠い昔からある。喜びを忘れないためだ。事例は数多く、喜びの大小はさまざまであっても、忘れないためということは共通している。

私は鳳翔に来て年が改まってから官舎の改築を始めた。建物の北に亭を建て、亭の南に池をうがち、水を引き、木を植え、休息の場にしようとした。

春になったばかりのころに、山の北側で空より麦が降った。占いによると、麦は雨の降る形を示し、豊作になるということであった。ところが、それからひと

月を越えても雨がまったくなく、民衆は憂い顔になった。三月に入ってやっと一日だけ雨が降り、その九日後にもまた雨が降った。これだけではとても足りない。と民衆はまだまだ心配し続けた。そして三日後にとうとう大いに雨が降り、三日間続いてから止んだ。

役人は官舎の庭に集まって祝賀し合い、商人は市場に集まって歌い合い、農民は畑に集まって踊り合った。これまでの憂いは楽しさに転じ、病は癒えたのだ。そして私の亭はちょうどこのときに完成したのである。

私は亭において宴を催し、来てくれた客に向かって盃を挙げ、問いかけた。

「あれであと五日も雨がなかったらどうなったでしょうか」

「麦はまったく稔らなくなったことでしょうか」

「あれであと十日も雨がなかったらどうなったでしょうか」

「稲もまったく稔らなくなったことでしょう」

麦も稔らず稲も稔らなければ飢饉に陥ってしまう。困窮した民衆は争いごとを頻繁に起し、盗賊の勢いがさかんになって、私たちがこの亭に集まって楽しみをなさうとしてもできることではなくなってしまう。

始めは日照りであったけれども、天はこの民を見捨てず、雨を降らせてくださり、そして我らにこの亭での楽しみ事を与えてくださった。これらはみな天からの賜わりものである。忘れていいものではない。よって雨をもって亭に名を付けるのである。

そしてこのことを歌おうと思う。

天が珠たまを降らせてくれても、



凍える者はそれをまとうことはできず、

天が玉ぎよくを降らせてくれても、

飢える者はそれを食べることはできない。

雨が三日も続いてくれたのは、

誰の力のおかげだったのか。

民衆は知事が祈ってくれたおかげだと言うけれど、

知事は自分ではない皇帝の徳のおかげだとおっしゃる。

皇帝は自分ではない造物者ぞうぶつしやのおかげだとおっしゃる。

造物者は自分ではない太空たいくうのおかげだとおっしゃる。

太空とは冥冥めいめいとして名付けようもないものだ。

だが私は名を付けるという行為を亭あずまやにはしたのである。

——山に行つて祈つたボクちんの功績だと、誇らしげに歌つたりしたらげんなり  
だけど、そうじゃなくてよかつたよ。

名付けるといふことにちよつとこだわっているようだけど、名付けようがない  
と言いつつ、太空つて名があるのつて、ちよつとおかしかつたりしない？

㊦ 名とは本来、実体を反映したもので、逆に言うと、名のあるものには、その  
名が示すところの実体があるはずだと我々は考えていました。名というものは単  
なる呼称で、ものと呼称の対応関係は任意であるとは考えていませんでした。

太空たいくうと呼ぶからには、太空たいくうという名に相応する実体があるということになりま  
す。しかし、太空とは大いなる空くうですから、そもそも実体がないと言っているの

です。宇宙の諸原理を人格化したのが造物者であるということはお話ししました。私たちは人格神のようなものが宇宙を支配していると考えていたわけではありません。その点で、造物者という名は、その指すものとは一致していません。そもそも造物者なるものに実体があるかどうかかっていません。だから、名付けようがないのです。

——なんかわかんないけど、雨が降ったのは、本当のところは神様のおかげでも  
太空のおかげでもなく、要するにごくあたりまえの気象現象で、あえて言えばそ  
れを支配する物理法則のおかげだよ。ボクの叔父さんは学生のとくに気象の勉  
強なんかもしていたらしくて、本棚に気象力学なんていう本があつたりするんだ  
けど、数式で書き表される物理法則が実は造物者ってことだったりするのかな。

数式って実体があるのかな？

で、結局のところ早魃にはならずすんだの？

㊦ 幸いにもその年は例年並みの収穫がありました。そのお礼に宋知事は太白山の神の廟を改修しました。

ついでにお話すると、太白山の神は雨をよく降らせてくださることから、7年ほど前に当時の知事が皇帝に願ひ出て「済民侯」さいみんこうの称号を贈り、廟を立派なものに造り替えていました。ところがそのころから鳳翔一帯では雨が少なくなり、神に祈っても十分な験しるしがないということが続いています。たまたま私は唐の時代の資料を見ていて、天宝14年、つまり安祿山あんろくざんが反乱を起こす直前に、太白山の神は靈応公れいおうこうに封じられたという記録を見つけました。公とか侯とかの爵位には序

列があり、上から順に公、侯、伯、子、男だんです。唐の時代にすでに公になっていた太白山の神は、はからずも宋の時代に侯に格下げされていたのです。それでは神も不快であろうと、宋知事は事情を皇帝に申し上げ、明応公めいおうこうの称号をお贈りするようにして、真新しくなった廟の額に掲げたのです。

——神様も序列を気にして意地悪をしたってことか。それで、位が公にもどつてからは雨がじゃんじゃん降るようになったの？

㊦ 残念ながらそうではありませんでした。その年は早くも9月に早くも雪が舞うなど天候は不順ぶくみで、翌年（一〇六三年）の夏には雨が降らず、再び太白山の神に雨乞いをしたのですが、それでも雨が降りなくて別の神にも祈るといふこ

とになりました。

その話はまた後にするとして、とりあえずこの年の始めのあたりはおいしい仕事が一続き続いてくれて、これなら官僚としてうまくやっけて行けそうだと自信を持つようになりました。

ところが、さすがにいいことばかりというわけには行きませんが、夏になったころから私の気持ちは徐々に下降線をたどり、そのままずると調子を崩して行ったのです。あれはいわゆる5月病であったのでしよう。

——えっ、5月病？ トーバー君が？ マジで？ だって、順調だったんだよね。  
ここまでの話で、5月病になるような要因はどこにもなかったみたいだけ。

① 何が我が身に起こったのか、最初は自覚がありませんでした。どこことなく気がふさいで、弟に会いたいか、郷里に帰りたいたいか、しばしば思うようになってはいたのですが、すでに聞いていただきましたように、そのような思いはもとからあって、詩にも詠んでいましたから、特におかしなこととは全く思っていないせんでした。そのうち、仕事をするのが億劫でならないとか、夜よく眠れないとか、気分がどんどん重くなっている、自分で一番変だと思ったのは、人と会うのをとにかく避けたいとはっきり感じるようになったことでした。

地方官の官舎は、生活の場であるとともに執務の場も兼ねていました。私は知事の補佐役というそれなりに重い職務を担っていましたから、自室に官員や吏人が頻繁に出入りして、人と会いたくないと思っても、どこにも逃げ場はありませんでした。戸を釘で打ち付けてしまいたいと思っただけならかなりの重症ですよ。

——へーえ、そうなんだ。意外だなあ。いまのトバー君からは想像がつかないよなあ。だって、だれとだって自然体ですぐに親しくなれるような感じがあるもの。ボクがずけずけ言っても、余裕ぶつちぎりで受け流してくれるしね。そんな余裕のよっちゃんのトバー君が対人関係で悩んだりしてたんだ。ボクなんかはどの職場でもうまくいかないことばっかだったから、トバー君も大変だったって聞くと、ちよつと安心できるかも。

① 私としても、人との関係でつまづくようなことがあるとは予想外でした。しかし、もともと隠者に憧れていた私は、本当は人と付き合うのが得手ではなかったのでしょう。思えば、仕事に就くまで私はずっと父の庇護下にあつて、弟を最



良の友として、もっぱら学問に励んでばかりいました。ごく普通の対人関係を形成するという経験が圧倒的に不足していたのでしよう。憧れのスーパースターや宋知事のように尊敬できる目上の人で、私の才能を評価してくださる方の前では、自然体で振る舞うことができて、同輩や部下が相手となると、どこか不自然なことになって次第に歪を溜め込んでしまったのだらうと思います。

同輩や吏人との関係はどうあるべきか、私は私なりに考えていて、それを実践するのに特別な困難があるうとは思っていませんでした。しかし現実はいささか違っていて、同輩と初めて会ったとき、どことなくさこちなさを感じ、軽いとまどいがありました。いずれは馴染めるものと思っていたのが、時間とともによそよそしさが増し、いつしか溝が生じてしまったのです。一方で、吏人とは初めて会ったときに気安さを感じて安堵し、時間が経つにつれて親しみが増し、それは

それで楽ではあったのですが、あまりに馴れ馴れしくしすぎるようなところがあって、どこか落ち着かないものを感じるようになりました。

どう言ったらいいのでしょうか、同輩や吏人を相手にしていると、ふと、これは自分自身ではなくて別人が演じているのではないかと、強い違和感に襲われるのです。おかしな演技をやめようとしたら、人と会うのをやめるしかありません。しかし、人は次々に私の部屋にやってくるのです。

——それは息がつまるよね。

いまはテレワークとかいってさ、ネットを使って自宅で仕事ができたりするのは、通勤時間がゼロでラクのかなって思うけど、公私混同の逆というか、自分の私的な空間が侵略されてしまうような気もするね。ネットを介して、会社の人

ずかずか家に入り込んでくるような感じになったりするのかもね。

別人が演じているというので、マニユアル通りにしろと言われて、よく失敗したのを思い出した。言われてもできていなくてさ、「まだわからんのか！」ってよく叱られたんだ。わかっているけど、その通りにはやれなかったりするんだよね。あ。ボクはこだわり出すとホントにこだわってしまうところがあって、こわいんだよ。マニユアル通りにしなければと思いついで、それがこだわりとなって抜けられなくなったら、自分がどっかに行っちゃって、ボクがマニユアルになっちゃうもんね。

ⓧ 精神的な不調をはっきりと自覚したのが6月ごろだったでしょうか。鳳翔府

で私のことを理解してくれるのは宋知事だけで、ほかの人とは誰とも会いたくな

いと思いなながらも、とにかく我慢して仕事を続けていますと、7月に長安の劉りゅう原父げんはから一通の辞令が届き、一時的に私を救い出してくれました。劉知事は、鳳翔府に赴任する途中に立ち寄ったときに連日の酒宴で歓待してくれた人です。「石オタク」と言ったら思い出しますか。

劉知事はこのあたり一帯の受験生を集めて行われる科挙の地方試験の総監督に任命され、その助手となる者を各地の若手官僚から選抜し、その中に私も入れてくださったのでした。先に、科挙の試験監督をするのが嫌だったという詩をお聞かせしましたが、それは試験のやり方が大きく変わってしまったからで、試験監督に選ばれることは本来は名誉なことでありました。官僚になってまだ1年に満たない私を劉知事が選んでくださったことに感謝し、しばらくの間でも鳳翔府から離れられるのはありがたいと、すぐに長安に向けて出発しました。

おもしろいことに、鳳翔府を出るとたちまち元気になって、この機会に少々遠回りしてあちこち見物しながら行くこうと思いい立ち、わざと山側の道を選んでぶらぶら進んで行くと、同じく招集された章惇しょうてんという者とぱったりと出会いました。章惇も同じように、出張ついでの小旅行を楽しんでいたのです。

——なんかうまいことやったね。職場が原因で精神的に不調になったら、職場を離れるのがいちばんなんだよね。たちまち元気になったというのはよくわかるよ。トバー君もふつうの人なんだって、さらに安心するなあ。

㊦ 章惇は私と同年で、私より1歳上でした。同年というのは、同じ年の科挙に合格した仲間という意味です。互いに名は知っていましたけれど、話をするのは

そのときが初めてでした。私は科挙に合格してすぐに母が亡くなって郷里に帰ったために、同年との交際を合格後に深める機会を逃したのでした。

——同年っていうのは同窓生のようなもので、仲間意識が強かったりしたって言うってたよね。でも、同窓生だからといって、仲よくできるとは限らないよね。同じクラスにいやなヤツはやっぱいたりするもの。ボクの叔父さんはなんかは、高校の同窓会が好きで、数年前に30年ぶりぐらいに開いてからは毎年やってんだよね。ボクは同窓会の通知がきても行かないなあ。会いたいって思わないもの。叔父さんみたいな白髪頭の年齢になったら、もしかして違うのかもしれないけどね。

㊦ このときの章惇との出会いは運命的であったと言ってもいいでしょうか。

その前に、科挙に合格した直後に、1人の同年が都の下宿を訪ねてきたことをお話しておきましょう。その人は晁端彦ちやうたんげんといい、私より1歳上でした。つまり章惇と同じ年です。40年ほど後になってそのときのことを回想した詩があります。

一かの時に私は二十二歳、

都に來ても、広い天下に知る者としてなく、

ただ弟だけがいた。

そこに不意に門をたたく者が現れた。

背が高く、鶴のように痩せ、清らかな所作で、

何か求めるところのある様子だった。

「私は歐陽脩先生おうえいしゅうの門下にあつて久しい者、

このたび先生より、あなたとところに行くよう言われました。

あなたは必ず世に名をなす人であるので、

あなたと交際して、私も名をなすようになりなさいとのことですよ」

酒は醒め、夢は断たれ、あれから40年が経った。

鶴は衰えることなくますます骨ばったけれど、

私の顔は恥ずかしいほどに老けてしまった。

先生の薫陶を受けた者は天下に散り散りになり、

いまでは幾人の白髪頭を集めることができようか。

私は己の力量を測ることであなたに劣り、

自分の分際を超えた地位に達してしまった。



あなたが次の職として会稽かいけいへの赴任を希望しているのはよい考えだ。  
万をもって数える溪流のあるまことに結構なところだから。

このとき私は57歳、晁端彦は一つの役目を終え、次の任務を授かるために都に向かう旅の途中でした。私はこの後すぐに都に呼ばれ、分際をさらに超えた地位に就いたのですが、直後に政変があつて都を追われ、次々に罪を重くされて、ついには海南島かいなんとうに流されたのでした。そのとき私の運命を操つた最大の政敵がいまからお話する章惇でした。晁端彦は同年のよしみで、あまりに手荒すぎると章惇に苦言を呈し、左遷されてしまいました。

晁君はまさに鶴のような人でした。常に清らかで慎ましく、私のように口と筆のせいで騒動を起こすようなことはなく、

「あなたは どうして そんなにも こらえ性がないのですか」

まさに 核心を 突く 晁君の 問いに、私は こう 答えました。

「食べ物に 蠅が入っていたら、誰だって ぺっと 吐き出さずに いられませんでしょう」

—— ははは、それって、トバー君のお得意のセリフだったんだ。前も話してくれたよね。

㊦ 晁君は、

「そつと見えぬように 吐き出せば よろしい ではありませんか。あなたは 吐いた 蠅を ことさらにつまみあげて 周囲に見せる ような ことを します。いつしかそれがあ

なたの一命に及びはしないかと心配でなりません」

晁君の忠告に従うことができていたら、海南島に流されたりはしなかったのでしょうか。そうであれば、「平生へいせいに冠かんたる遊たびの奇絶」を経験せず、ここであなたとこのように話をすることもなかったでしょう。

——そういうのって、「詩人の不幸は詩の幸い」ってヤツだよ。トバー君が大変な目に遭ってくれたからいい詩が生まれて、ボクはその話を聞けるってことだね。ジョン・クレアだって、初恋の人と幸福な日々を送っていたら、ボクがああ詩に出合うってことはなかったんだよなあ。

① いまのは誰の言葉ですか。

——ちゃんとは知らないけど、たぶん叔父さんから聞いたように思う。

ⓧ でしたら、「国家の不幸は詩家の幸い」というのをもとにあなたの叔父さんが作ったのではないでしょうか。これは、元好問げんこうもんという人の詩を趙翼ちようよくという人が評した言葉です。どちらもご存知ないですよ。

元好問は私より150年ほど後の人で、金王朝きんの滅亡を目の当たりにし、異様なまでに緊迫した詩を詠みました。金王朝は中国東北部を本拠地じょしんとした女真族が建て、我が宋の北半分を武力で奪い取りました。金王朝は我が宋にとって憎き敵でありましたが、元好問は、女真族だらうが漢民族だらうが、中国文化の伝統を守る者が正当な中国の王朝であると考えていました。元好問は自分こそが中国

の詩の伝統を受け継ぐ者、とりわけ杜甫トホの詩の後継者であるとの自負があり、「国家の不幸」を強靱な精神力で詩にうたいあげたのでした。金王朝が滅亡した後、己はいかに生きるべきかを模索しつつあったころには、私が黄州に流されたときの詩を強く意識した詩を詠んだりもしました。趙翼は清しんの時代の歴史家で、清朝はやはり女真族の建てた王朝でありましたから、元好問に強く共感するところがあつたでしょう。

話がそれましたが、元好問の存在は現代においてきわめて示唆的だと思つので、あえて言及しておきます。例えば、日本の文化の伝統を受け継いでさらに発展させるのは、日本で生まれた日本人でなくても少しも構わないのではないのでしょうか。日本人でなければというのはかえって文化を痩せさせ、伝統を傷付けることもなりかねません。相撲を見ればよくわかりましょう。

国境に壁を作ると大言を吐く人がアメリカの新しい大統領になろうとしていて、一方で歴史を直視せずに「日本を取りもどす」と主張している総理大臣がいるいま、古臭いと感じる昔のことにも目を向けて、落ち着いた思索を巡らせてみるのも必要ではなからうかと思えます。

——漢文の授業は寝てばっかだったボクとしては、ここで反省しないといけないってことかな。昔のことも知ってないと、表面的な言辞についてうっかりだまされちゃうもんね。でも、あの授業は寝かせるためにわざとしていたとしか思えないくらい眠かったんだよ。

Ⓣ では章惇との出会いに戻りましょう。

ひと目見るなり互いに気が合うと知れ、馬を並べて進む間に、打てば響くとはまさにこのこと、次から次へと話題が広がり、折よく酒旗をかかげる店があり、一杯が二杯、二杯が三杯と、いい具合に酔いがまわって、口角泡を飛ばす大議論とはまさにこのこと、森羅万象を縦横に論じ合つたのです。一を言えば十が返り、それに百を返せば千が返るといふ感じで、卓球やテニス的高速ラリーのように章惇とのやりとりが楽しくてたまりませんでした。章惇に知らないことがなければ私にも知らないことはなく、古今の豪傑の名を手当たり次第に挙げて、秦叔宝としんしゅくほう楠正成くすのきまさしげならどつちが強いかと、博引旁証、牽強付会の大勝負をわあわあやり合っていますと、ばたばたと馬を走らせてきた村人が、

「山に虎が出おつたとよ。村のもんも、旅のもんも、気を付けてくんと、触れてまわってるだよ」

虎の出た場所を告げて、すぐにまた駆けて行くと、それを聞いた私たちは、どちらからともなく、

「よし、虎を見に行こう」

すぐに馬に飛び乗りました。酔つての豪傑談義で気が大きくなっていたのでしよう。虎が出たという場所まであと少しというところまで走って行くと、私の乗る馬がいきなり脚をぴたりと止め、一步も進もうとしなくなりました。章惇が振り返り、

「どうしました。さあ！」

大きく腕を振ったので、馬に鞭を当てようとする<sup>から</sup>、徒で追つてきた馬正卿<sup>ばせいけい</sup>がその鞭を掴み、

「馬でさえ行くべきか退くべきかを知っているではありませんか。若旦那様はこ



「ここで何をなさろうというのですか」。

その声に、はっと我に返り、数度ごつごつと額を叩き、

「これはしたり。虎退治は加藤清正かとうきよまさの十八番おはこ。私のすべきことではなかった」

馬正卿がこのように私を制止したのはこれが最初で、その思いがけない振る舞いで一瞬にして酔いが醒めたのでした。

——ちよつと、待って。なんでここで加藤清正が出てくんの？ さつきも楠正成とか言っつて、絶対におかしいよね。いくら歴史に弱いボクでもわかるよ。

㊦ 900年以上も昔のこと、少々記憶にあやしいところがあるのはお許しくだ  
やう。

章惇は笑い、

「君は君、私は私です」

そのままひとりで山道を登って行き、私はその場で待つことにしました。しばらくすると章惇は悠然ともどつて来て、

「少々虎と戯れてきましたぞ」

と、次のように話してくれました。

虎は林を抜けた先の大きな岩の上に立って、あたりを睥睨へいげいしていました。章惇が近づく気配に虎は首を向け、しばしにらみ合いとなりました。章惇はじりじりと距離を縮め、間合いを十分に測って懐中より銅沙鑼どうさらを取り出し、虎の足元へ勢いよく投げつけました。

銅沙鑼というのは、碗のような形をした銅製の打楽器で、行軍中にジャンジャ

ン鳴らして氣勢を挙げ、水を汲んだり手を洗ったりする道具として用いたりもしました。章惇が投げた銅沙鑼は岩に当たり、ガンガラガツシヤーンと大きな音を立て、虎は驚いて走り去りました。

章惇は、

「豪胆さでは君は僕に及ばないということだね」

私は、

「小心さでは君は僕に及ばないだけのことさ」

2人で大いに笑い合つて酒店に戻り、呑み直しました。

章惇とは何を話しても楽しく、試験の期間中はずっと一緒でした。劉知事は2人が互いによい友を得たと大いに喜んでくださり、

「君たちを結びつけたのがこの私だということを忘れないでいてくれたまえ」

と言いました。

試験が終われば章惇と別れなければならず、長安を発つて鳳翔に帰る道中の気の重いことといったらありませんでした。うなだれて鳳翔府の城門をくぐり、高い官舎の敷居をやつとの思いでまたぎ、仕方なくもとの仕事に戻ると、前以上に毎日が憂鬱で、どんどん調子が悪くなつてしまいました。

弟への手紙に、生涯の友を得たと章惇のことを記し、鳳翔府に章惇がいないのを悲しく思つたのでした。

——一目惚れした恋人と別れて帰つて来たくらい勢いだね。日常と離れた場で高揚感にひたつて、もとにもどつて落差にがつくりするつてことはあるよね。

でもさあ、ちよつと勘ぐると、同僚がよそよそしいってきつき言つてたけど、

章惇のような優秀な人となら話ができるけど、同僚なんか相手にならないって、どっか見下すようなところがトバー君にあったってことだったりしない？ 超難関の試験を突破した自分とあんたらとは違うっていうような。

㊦ 当時の私には、そのようなさもしい見が自分にあるはずがないとの思い込みがありました。なぜなら、部下であると吏人とは分け隔てなく親しくしていたのですから。

8月に伯父の蘇<sup>そかん</sup>渙の訃報が届き、それが私の気持ちをさらに落ち込ませました。伯父は我が蘇の一族で初めて科挙に合格した人で、その存在は私たちにとって極めて大きなものがありました。伯父が新しい任地に向かうのを都の門の外で見送ったのは2年前の秋、制科の試験の直前でした。よもやそれが最後になるとは想

像もしていませんでした。そのとき伯父は60歳で、非常に元気で、何の持病もありませんでした。伯父はまだまだ活躍するとはかり思っていたのに、突然に亡くなったのでした。

官僚になればお上の指示でどこへなりとも行かなければなりません。伯父のよ  
うに任地で生涯を終えることも、もとより覚悟しなければなりません。伯父の年  
齢になるまでには30年以上あつても、故郷の山で世捨て人として生きるのが本  
来の自分なのではないのかとの思いがある私としては、時を逃さずに官界から身  
を引かなければならないと、早くも焦燥感のようなものが生じてきました。弟と  
約束した「夜雨対牀」やうたいしょうもあります。それが果たせないのなら、官僚としてどれほ  
ど活躍したところで意味がありません。

このときは伯父を悼む思いを詩に詠むだけの心の余裕がなく、詩ができたのは

1年余りも経ってからでした。

手を振って都の東の門で別れたとき、

伯父の顔はつやつやし、髪に白いものはなかった。

そのときのありさまが夢のように思われ、

いまだに亡くなったのが信じられずにいる。

後に遺されたのは千余篇の詩と文。

新たに作られたのは天の彼方の墓。

息子たちが困窮しないですむように、

昔むかしの物まね芸を皇帝の前で披露するのはいったい誰なのだろうか。

この詩には少し説明が必要でしょう。「天の彼方の墓」とは、郷里に作られた伯父の墓です。伯父は自分の懐を肥やす努力をしなかったために、後に遺されたのは詩や文章のほかにはごく慎ましやかな財産だけでした。そのほとんどすべてを従兄弟たちは伯父の亡骸を郷里に運んで墓に納めるために使ってしまった、すぐに生活に困るばかりになってしまいました。

——それって、葬式にかなりのお金が必要だったってこと？ たしか、馬正卿は両親を葬ることもできなかつたって言うってたけど。昔の中国では親の葬式って一大事業だったってことかな。いまの日本でも、葬式のお金がなくて、親だかの遺体を床下に隠していたっていうニュースがあったような気がするけど、



㊦ 亡くなった親をできる限り手厚く葬りたいというのは、太古の昔から今に続く中国の伝統です。親孝行は大切な徳目であり、そうすることが死後の親の暮らしを安楽なものにすると考えられていました。亡くなった人は死後の世界においても己の肉体を使用するので、遺骸は大切に扱わなければなりません。焼くなどともんでもないことで、恨み骨髄の敵の遺骸を掘り出して焼くということが、かたき討ちの一つの手段となっていました。皇帝クラスになると、遺骸を水銀に漬けて生きているときと同じ状態をいつまでも保とうとしたこともあります。一般人もできる限りいい棺を用意していい状態で納めようと思いました。亡くなった人が死後の世界で豊かに暮らすことができれば、それが現世に生きる子孫の繁栄につながると思えられてもいたので、惜しむことなく莫大な費用を葬儀につきこんだのです。

詩の結びで「昔むかしの物まね芸」と言ったのは、私の時代よりも1700年ほど昔の優孟ゆうもうという宮廷芸人の故事に基づきます。芸人は卑しい身分とされていましたが、宰相の孫叔敖そんしゆくこうだけは優孟が賢人であるのを知っていて、いつも友人として接していました。

孫叔敖はきわめて清廉で、病気で死ぬと、後に遺されたものはほとんどなく、家はたちまち貧乏になり、息子は仕方なく薪を背負って売り歩きました。しかし、重い荷を担ぐことに慣れておらず、上手に売ることもできなくて、泣く泣く街を歩いて行くと、優孟とばったり行き逢いました。息子は優孟にすがり、「ぼくは孫叔敖の子です。父は死ぬ間際に、困ったら優孟殿にお頼みするよう申しております。どうか助けてください」と、わあわあ泣きました。優孟は薪を買ってやり、「必ずお上からお召しがあるようにしてさしあげましょう。どうかその日がく

るまで、耐え忍んでいてください」と言って別れました。

その日から、優孟は孫叔敖の話し方や振る舞いをそっくり真似る練習を始めました。十分に会得すると、孫叔敖が生前に着ていたのと同じ衣服をあつらえ、それを身に付けて王の前に出て、孫叔敖とそっくりの挨拶をしました。王は、孫叔敖が生き返ったかと驚き、近くに呼んで話をすると、まさしく孫叔敖と同じ賢さを具えているとわかったので、「よし、君をまた宰相として用いるとしよう」と言いました。優孟は「ありがたき幸せながら、宰相になりましたも、まこと割に合いませんのでお断りいたします」と、次のように歌いました。

田舎の畑仕事ときたらつらくつらくて、

食うのも難しかったから、

おいらは、身を立て、お役人になることにした。

お役人になって、まわりを見たら、

ひと財産を築く者といったら、

貪欲で恥知らずの連中ばかりだった。

おいらも身を粉にしてせっせと家を豊かにした。

そしたら、賄賂を受けたあの、法を枉まげただのと追及されて、

我が身は死刑、一家は滅亡となっちまった。

悪代官ではうまくいかないのなら、

法を守ってお役目大事、

死んでも悪いことはしないと、

正しいお役人になったらいいのだからうけど、

それとてやっぱりうまくはいかぬのさ。

だって宰相の孫叔敖様は死ぬまで清廉だったけど、

遺された妻子はいまやどん底暮らした。

薪を売って歩いて食うや食わずの身。

お役人とはとんとやりがいがないものだ。

ああ、まったくだあ、まったくだ。

それを聞いた王は優孟に詫び、孫叔敖の息子を召し出したのでした。

——うーん、それってきつと美談ってことなんだろうけど、なんかへんじやない  
すか？ 今夜のボクは徹底的にひねくれて言うと、王様はなんか違うと思うんだ

よなあ。だって、はつきり言ってぼんくらじゃんか。優孟の歌を聞いて王様がま  
ずしなければいけないのは、貪欲な役人がはびこらないようにするってことなん  
だよ。昔の宰相の子を召し出すことでは絶対がない。親の七光りで貧乏暮しから  
抜け出せてメダシメダシって話になっちゃうだけだもん。

まさか、トバー君は、亡くなった伯父さんの息子たちのために、皇帝の前で  
優孟のようなことをしようとしたの？

Ⓣ 何度かお話したように、宋代の科挙は完全実力主義で、高い地位にまで昇つ  
た者に限って子弟が無試験で官僚になれる特権が与えられていました。伯父も私  
たちも特権とは無縁でしたから、優孟のようなことをしたくても何のとっかかり  
もありませんでした。我が蘇の一家にとっては偉大な伯父であっても、亡くなれ

ば子孫はすぐさま困ってしまうというぼやきの詩であると理解していただければと思います。

私は一段と気落ちしたまま季節は秋となり、9月9日にまことに些細な出来事があり、それを境に同輩との関係がすっかりこじれてしまいました。

9月9日は重陽ちゅうやうの節句で、古い中国ではとても大切にされた行事の日です。ものには必ず陰と陽があるとされ、数字でいうと偶数が陰、奇数が陽です。9は陽の極まったもので、9と9の並びは陽が強すぎて不吉とされていました。そこで9月9日には茱萸しゅゆの実で不吉を祓う習慣が生まれ、不吉が転じて吉となり、郊外の高い場所に登って菊の花を浮かべたお酒を飲んで長寿を願うということが行われるようになりました。

鳳翔きて初めての重陽の節句、ここではどのようなことをするのだろうか、

その日を迎えますと、何かをするという報せもなく、いつも通りに官舎で過ごして、ふと気付くと、同輩の姿はあたりになく、私一人だけになっていました。外で用をしていた馬正卿に聞くと、皆は二々五々出て行ったらしく、特に不審な様子はなかったということでした。

——— どういうこと？ こつそり仲間はずれにされたってこと？

Ⓣ 本当のところはわかりません。皆で計画して私を置き去りにしたということではたぶんなかったでしょう。

——— でも、結果としてはそうだったんだよね。



ボクも似たようなことがあったのを思い出したよ。ちょうどいまごろの時期で、職場の忘年会だったんだけど、金曜日で、ボクは知らないからフツーに家に帰ったんだけど、月曜日になって、みんなが話している様子からなんとなくわかったんだ。すつげエむかについて、「やっぱし、そっかあ」って思って、正月休み明けに退職届を出してやったんだ。

いやあな感じの先輩がいてさ、じくじくイヤミだったらしいことばつか言われて、ほかの人もそいつがこわいから、知らん顔なんだ。ボクが標的になっている間は、ほかの人は助かるってことなんだよなあ。サイターの職場じゃなかったってたよ。だから、辞めて正解だったんだけど、ちよつとだけ誤解があったんだね。辞めた後で、たまたまその職場の人に会って、そのいやな先輩がいたんではきつと忘年会にきても楽しくないだろうから、幹事になった人が伝え忘れたことしよう

って、そういうことだったって聞いたんだ。それもどうかとは思うけど、ボクのことを気づかってくれた人もいたのに、何も話さずに辞めちゃったはちよつと悪かったかなあつて、反省したんだ。

㊦ 私もやはりそうかと腹を立て、皆が帰ってくる前に戸を閉ざして眠ってしまった、翌日も同輩と顔を合わせる気がしなくて、朝早くに官舎を抜け出し、酒を携えて普門寺ふもんという寺に行き、そこでひとりで一日遅れの重陽の宴と洒落込みました。酒がまわってくれば想うのは弟のこと。

ここには菊の花が開き、酒は美味であるけれど、南に仰ぐ山の高みはいかにも冷え冷えとして、

そのありさまを見るにつけ、

どうして郷里に帰らずにいるのだろうかと思ってしまう。

我が心は、南に翔る雁とともに飛び去ろうとし、

山にかかる雲は、弟を想う我が涙を降らせようとする。

昨日は重陽の宴を楽しむべき日でありながらそれに違たがうところがあった。

来年のこの日に健やかでいられるとしても人は必ず老いてしまう。

その昔、重陽の宴に酔い、帽子が吹き飛ばされても気がつかずにいた人がいた。

その人の振る舞いがおかしかったのではない。

それを見ていた人が問題だったのだ。

陽気に笑えばいいのに、ひそひそ諺そしったのだから。

昔むかしの中国人は頭に必ずかぶりものを載せ、人前で何もない頭を露わにするのはとても恥ずかしいこととされてきました。いまでいうと、いわゆる社会の窓を開けっぴろげにするのに匹敵するでしょうか。

私より数百年前に孟嘉<sup>もっか</sup>という人がいて、重陽の宴で帽子を吹き飛ばされてもそのまま飲み続けていたので、まわりの人はひそひそ嘲り笑いました。孟嘉は笑われていると知っても泰然としていました。世間のちまちました尺度では測れないところで生きる風流人であったからです。

——ああ、わかった。トバー君は自分こそは孟嘉なんだと言いたいんだ。自分を仲間はずれにして、こそこそ笑っている連中こそが嘲笑されるべきだって、詩で鬱憤を晴らしたってことだね。

たしかに仲間はずれにしたのなら悪いことだけど、さつきボクが言ったみたいに、同僚を見下すようなところがトバー君にあったようにも思えなくもないな。いまの詩を役所の人たちが知ったらなんか気分悪いだろうね。

① 蠅を吐き出してまずいことになった最初の事例がこの詩だったのでしよう。同輩との間にはつきりと溝が生じ、仕事上の話さえほとんどしなくなり、吏人たちは敏感にその様子を読み取って、私のところにくると同輩のよろしくないところをあれこれ言い募るようになりました。うっかりそれに同意しそうになるのが不快で、すっかり何もかもが嫌になり、鬱々とした日々を過ごすうちに、9月20日に雪が降り、弟を想って2首の詩を作りました。

9月20日というのはいまの暦でいうと10月の終わりに当たるでしょうか。

鳳翔は気候が比較的厳しい土地柄ではありますが、それにしても珍しく早い降雪でした。そういえば、この前は東京で11月に観測史上初めてという積雪がありました。それが、それに近いくらいのことでした。

天は鳳翔の九月に淡い雪をもたらし、

早くもものさびしい年の暮れの心持ちにさせられた。

昼間が縮んで、寒さに備えて打つ砧きねたの音がせわしく響くなか、

役目の薄い役人は、事もなく家の奥に引きこもっている。

君と別れてからの愁いは酒が消してくれているはずだった。

秋になって櫛にはしきりと抜けた白髪が付く。

国境の塞さいの外の寒さにも耐えるという貂てんの革の裘コートを買ってみた。

それをまとして、宿場ごとに用意される御用の馬を乗りついで、西方の国に宝物を探しに行くというのは、どんなものだろうか、私はいま真面目に想っているところだ。

☆

都へと向かう船で、君と箱いっぱい詩を作った。

都の外で君の馬と東西に分かれたとき、涙が胸にしたたり落ちた。

官人に採用されてから国に報いることはまだ何もできていない。

書物や剣の前で恥じ入らねばならない。

こんなことならいつそ帰郷してしまおうかと思おもする。

しかし、同僚たちの手前を畏れないわけにはいかない。

まだ秋なのに、もう年が暮れてしまうのかと驚くばかりだ。

雪景色を寺の二階から眺めようと思っても、

一緒に登ってくれる人はいない。

兄はいまこんな体たらくだ。

君はきっと東の窓辺に机を置いて『易経』えききょうの研究に没頭し、

馬車が止まって門を叩こうが一向に応じようともしないでいることだろう。

——なるほど、これは暗く重い気分だね。遠くの国に行ってしまおうと夢想したり、故郷に帰ろうと思ったりしたんだ。ちよつとわかるかも。一心に勉強しているであろう弟と比べて兄はこんなだつて言うのは、5月病が悪化して、はつきり抑うつ症状になってしまったつてことじゃないの？



㊦ 恥ずかしながら、そうだったのでしよう。

——恥ずかしいなんて言ったらダメだよ。そういうのってき、ごくフツウのことなんだよ。皇太子妃だつて適応障害で長く苦しんでるよね。ボクなんか五月病を繰り返し経験してきたようなもんだから、いつつも明るくやる気満々って方がかえっておかしいんじゃないの、よっぽど恥ずかしくないって思っちゃったりするけどな。ボクって、ひねくれてるよね。

㊦ いわゆる心身症ということになったのでしよう、体の方も調子を崩し、時折寝込むまでになってしまいました。

——へーえ、かなりの重症だ。トーパー君はさあ、難しい試験に合格して、自信満々だったから、現実のちよつとしたことから、かえって落ち込みやすかったのかもしないね。

① そのようなときに、弟からの手紙で、思案の末に任官を辞退したのを知りました。私たちが試験に合格して、私にはすぐに鳳翔赴任の辞令が出ましたが、弟には音沙汰がなく、それは弟を嫌う誰かの横槍によるものではないかと推測されました。1年近く経つてようやく赴任先が商州しょうしゅうに決まりました。商州は長安の南東に位置し、弟がそこにくれば何かのときには会えるのではないかと、心身の調子がよくない私は期待をしました。それに、商州は章惇の任地で、2人が同僚になるのは楽しい偶然であるとも思いました。

弟は父親への孝を理由に辞退しました。父は都での仕事を授かっていて、私に続いて弟も地方に出てしまうと父は1人で都に残らなければなりません。父に不自由させたくないと言われ、弟はお上に申し出て、辞令は取り消されました。

——へーえ、そうなんだ。弟さんがいないとお父さんは困るの？ でも、お父さんは放浪の旅をよくしていた人だから、1人でもぜんぜんOKなんじゃないの？

㊦ その通りです。辞退を申し出る一番いい口実として親への孝を持ち出したのです。直球勝負の弟としては、もやもやした状態では辞令を受け取れない、執行部の体制が変わるまで断じて仕事に就かないという思いであつたでしょう。そのようなことを、さすがにあけすけには言えません。

古い中国では、親孝行はすべてに優先する切り札でした。ちょうど私が制科の受験勉強をしている間に、スーパースターの1人の富弼ふひつが宰相の職を辞すということがありました。富弼がついに宰相になり、「手本は范仲淹はんちゆうえん」の志を継いで国政に大改革に乗り出すであろうと多くの人が期待しました。しかし、いろいろな事情があつたのでしよう、着手する様子がなく、一部から激しい批判の声が出始めました。富弼は政争を嫌い、老いた母に孝養を尽したいというのを表向きの理由として、政界から一時的に退きました。親孝行を掲げれば、皇帝も引き止めることはできず、波風も立たないで済むのでした。

——親孝行なんてとつても古臭い感じがするけど、そういうのつてちよつとおもしろいかも。親のご飯を作るために早く帰りますって言えば、過労死が防げたり

して。介護休暇が取れないなんてこともなくなるかもね。親孝行を持ち出さなくつてもさ、とにかく仕事が優先するのが当たり前っていうのはおかしいと思うよ。

㊦ 弟にはいろいろな葛藤があったであろうと思い、手紙への返事として3首の詩を送りました。

病のなかにいる私は、君が商州には来ないと聞いた。

君と私が旅する雁のように翼を並べて飛ぶということはこれでなくなつた。

君と別れていることに比べたら、官位の高さなど意味がない。

君のことはばかりを思つて、日々の時間がどうしようもなく長い。

君に暇が多くあるのは、書物を著すにまことによいだらう。

私は官職に就いて何の功績もないから、みだりに故郷には帰りにくい。世間から隠れるのに最もよい場所が故郷であるとは限らない。

いま君がいる王城の地こそがいいのかも知れない。

大海の魚のように万人がいるのだから、一身を隠すのはわけもない。

☆

先ごろ私は章惇と会った。

章惇はまさに商州で官に就いていて、

商州の人々は君の赴任を待っているという。

商州というといくつか思い起こすことがある。

昔この地の帰趨を巡って王様をペテンにかけようとした策略家がいいた。

君の真直ぐな言説の前では、そんな連中は赤恥じをかくだけだ・

世の乱れを避けてこの地の山に籠った人がいた。

以来ここでは凡才は嫌われているということだ。

この地には独特の方言があり、やっと名前が通じるくらいだという。

余計なことは言わないですむのだからまことに結構ではないか。

この地の人には昔から瘤こぶが多くて首と顎の区別もつかないという。

上辺のよしあしにまどわされることがないのだからまことに結構だ。

君が試験で書いたことが気に入られなかったのなら、

お上に願って辞退するのではなく、

商州に来ることこそが君に最もふさわしいのではなからうか。

☆

官職を辞退した君の本意は誰も知らないだろうから、

役目が低いのを嫌ったと言いついて立てる連中が出てくるかもしれない。

そんなのはほっておいて、悠々と酒でも飲んでいればいい。

歳月は自然と流れ、髪や髭が自ずと白くなるだけだ。

君の答案が誰かの気にさわったあの、人々から嫌われたあの、

そんなことは憂うに足りない。

易経を読めばすぐにそうだとわかる。

夢のなかで私は君を求めてさまよった。

互いに心を知るのは私と君だけなのだ。

——もしかして、最後のところは、トバー君自身のために詠んだ？ 『易経』

っていうのは占いの本だよね。世の運命を司るものは何かといったことに思索を



巡らせば、誰かに嫌われたとかチマチマしたことなどどうでもよくなると、自分に言い聞かせようとしたんだよね。それで、うまくいった？ べたつと心にくつついた悩ましい思いが、ハガロンできれいにぺろぺろりんみたいに行った？

㊦

11月にはしばらく仕事を休むまでになり、伏せている間に大雪が降りま

した。雪のために、鳳翔から北に30里ばかり離れた町から来ていた趙薦ちようせん知事が

しばし足止めとなり、気晴らしにと、宋知事が雪見の宴を催しました。寢床にい

る私の耳に、人々の賑わいが遠く聞こえてきました。重陽の節句と同様に私だけ

はまた疎外されたように思っていると、宴席の趙知事から病気見舞いの詩が送ら

れてきました。その温かい心遣いに感謝し、同じ韻を使ったお返しの詩を作つて

使いの者を渡しました。

これで十日も伏せって、ひたすら薬と親しくしていると、  
どうにもならないほどの寒さを感じた。

つむじ風が窓を鳴らし、

寢床を囲む帳とばりまで巻き上げられた。

雪が深く積もったとも知らずにいると、

なんと雪の重みで軒板が落ちたと聞かされた。

そこに西隣りから歌や音楽が流れてきた。

寒さをものともせずに入々が続々と集まって、

大雪の中にもさぞや立派な道が通じたことであろう。

からっぽになった酒の瓶が次々に横に倒され、

人々の熱気で瓦の上の雪も融けたのではあるまいか。

よい酒に近づきたいと思いはしても、

雪の様子をのぞきに出る気力もない。

いつか夏の暑さのような活気を身の内に取り戻し、

我が体を働かせたいと思う。

いまは人気のない部屋でひとり憂いに沈んでいても、

いつかこちらから宴に招くようなことをしてみたいと思う。

昔むかしのこと、

友を呼びたくても毛氈もうせんさえないと嘆いた人がいた。

私のところには売って酒代にするくらいの衣類ならある。

しかし、招いても喜んでもらえるとは限らない。

つらつらそのようなことを思っていると、

寒さがまた一段と厳しくなった。

これは雪が晴れ上がったためかと身を起こすと、

半分の月が西にかかっているのが見えた。

そこにあなたからの詩が届けられた。

旅人はひとり苦吟するものと決まっている。

今夜は黙々と詩を作るのがよいのだろう。

詩人は昔から不遇であるらしく、

秀句は寒さと飢えから生まれ出る。

雪はいつか消えるだろう。

私も病を脱して、昔の詩人の後を追ってみたいものだ。

——こういうのを聞くと、トバー君って、意外とネクラっぽいね。ネクラって言葉もいまはもう古いのかな。

秀句は不遇な詩人から生まれるっていうのはさあ、さっきの「詩人の不幸は詩の幸い」と同じことだよ。もう仕事なんかおっぼらかして、詩人として生きればよかったのかも。病気で伏せていても、すぐに詩を返したんだから、ホントに詩が好きだってことなんだろうね。

でもさ、詩が作れるくらいなら、ちゃんと起きて仕事したらいいじゃんって、突っ込まれそうだよ。そういうのって、誤解なんだけど、わかってもらえないんだよなあ。抑うつ症の人って、仕事から離れれば元気だったりするんだよ。単なるサボリとは違うんだよなあ。

㊦ 同輩たちの視線は一段と冷たくなりました。事実がそうだったというより、私がそう感じたのでした。

仕事は休みがちのまま、鳳翔で2度目となる年末になりました。望郷の念が募り、故郷での年越し行事を回想した3篇の詩を作って弟に送りました。

農家はそれぞれ収穫を終えると、

互いに贈り物をし合って年を越す。

これを饋歳きさいという。

あまねく皆に喜びが行き渡らないのを恐れ、

値段の高下を気にせず市で贈り物を買う。

山と川とでは産物が異なり、

巨大な鯉を板に載せて贈るかと思えば、

兎を籠に入れて贈りもする。

貧富によって多い少ないがあり、

金持ちは華美を誇って、光り輝くばかりの刺繍で飾った織物を見せびらかし、

貧乏人は恥じらいながらも、

白を曳く賃仕事で稼いでほんのちよつとしたものを用意する。

私は役人仕事でここにきて、

官舎にくすぶったまま歳末を過ごしている。

故郷の饋歳の風習を詩に詠んでみても、

聞いてくれる人は一人もない。

☆

ゆかりの人が千里の旅に出ようとするととき、

ぐずぐずと別れが惜しまれる。

人は行ってもまた帰ってくる。

歳というものは行ってしまったらもう追いかけることができない。

「歳よ、君はいったいどこに行ってしまうのか」

「遠く天の涯だ。」

大河の水が東へと流れ、海に赴いて帰ることがないのと同じだ」

酒食を用意し、帰ることのない歳と別れるのを別歳べっさいと言う。

東隣では、酒がちょうど熟したとふるまい、

西隣では、豚がちょうど肥えたとふるまう。



一日を大いに楽しんで、

一年が終わる悲しみを慰める。

今年と別れるのを嘆き過ぎないようにしよう。

新たにくる歳ともいずれば別れることになるのだから。

「歳よ、行くなら振り返らなくていいぞ。

老いと衰えを君に持って行ってもらいたいから」

☆

まさに終わろうとしている歳とはいかなるものか。

谷底に赴く大蛇に似ていようか。

すべての鱗が谷深くに消えようとするときに、

誰がそれを止められよう。

尾を引っ張って頑張ってみたところで、

無益と知るほかはない。

除夜に朝まで眠らずにいるのを守歳と言う。

子供たちも眠るまいと、

互いに見張ってやかましくして夜を過ごす。

暁を告げる鶏は鳴かずにいてくれ、

時を告げる太鼓は鳴らずにいてくれと思っても、

久しく待つうちに燈火は尽き、

北斗七星は斜めに傾いてしまう。

夜が明ければ、新しい歳が来ないということはない。

しかし、新しい歳が来たところで、

我が心と我が事には、恐らくはつまずきがあるだろう。

せめてこの夜の思いを尽すことに努めたい。

まだ歳の内である間なら年若いと誇れるのだから。

——終わりのところで、「恐らくはつまずきがあるだろう」って言ったのはいよいよネクラ、悲観的なんじゃないの？ 調子が悪いから、来年はもつとよくないって思ったりしてしまうんだろうね。

㊦ ここは原詩では、

心事蹉跎（しんじ心事） 恐らくは蹉跎（さた蹉跎）せん

蹉跎とはつまずきです。この予感が果たして当たったかどうか、今日のうちにそこまでたどり着けるでしょうか。今夜もすでにそこそこの話が長くなっていますか。

——ちょうど年末なんで、この続きは年が改まってからなんというのはよしにしてほしいなあ。まだ時間はそんなには遅くないから、話を進めてよ。どんどん注文しちゃうから、どんどん吞んで食べてよ。

㊦ 年が変わって嘉祐八かゆう（1063）年となりました。すぐに弟から、故郷での春の始めの行事を詠んだ詩が二つ送られてきました。それに和した詩を聞いていた

だきます。一首目は、草が芽生えた野に出て遊ぶ「踏青」とうせいを詠みました。

東からの春風に、道にわずかな塵が舞うと、

新しい年の華やかさを楽しもうとする遊び心が湧いてくる。

閑さえあれば路傍で飲むのにちようどよいし、

麦はまだ短いから車輪に踏み敷かれても構わない。

町にちんまり籠っているのに飽きた人たちが、

朝早くからがやがやと、

そこらじゅうをからっぽにして出かけて行く。

歌だ、太鼓だと、野山で騒げば、草も木も動こうというもの。

酒だ、料理だと、野原に散らかせば、鳥も鳶もやってこようというもの。

どこの誰やらがいかめしい顔をして、

道をさえぎって大きな声を張り上げる。

「さあて、お立会いの皆々さま、

「我こそは道を極めた達人でありまする」

右に左にお符ふだを振り上げ、

「これこそは養蚕かめによろしいもの。

繭かめを大きな甕かめのようにしますぞ。

これこそは畜産ちくさんによろしいもの。

羊のろしかを大きな麩のろしかのようにしますぞ」

道行く人はそんな言葉を信じるわけではないけれど、

新春の縁起えんぎかつぎかつぎに買っておこうと思案する。

達人はひとわたり錢を稼ぐと、

すぐに酒を買い、酔って倒れて、こう言うのだ。

「ほうらみる。この符はこんなにも効き目がある」

——詩の雰囲気がなんか明るくなったかも。春がきて気分が変わったのかな。

インチキなおふだでも、たんまり酒が飲める効力がちゃんとあったっていうオチだね。900年以上も前も、そんなふうな商売をしていた人がいたんだね。人間のすることってあんまし変わらないんだらうなあ。

Ⓣ 春には、これからの農作業に備えて道具類を売るいろいろな市が立ちました。

私の故郷で一番規模が大きかったのは養蚕さんしのための蠶市さんしでした。

蜀の人間は、着る物、食う物のためにいつも苦勞している。

蜀の人間は、遊樂に出たら帰って来ることを知らない。

蜀の人間は、千人が田畑で仕事をすれば、

蜀の人間は、万人が遊んで食っていられる。

蜀の人間は、一年中働きづめた。

それでも、春ばかりはのんびりしていて、

養蚕市がにぎにぎしく開かれると、

いつもの辛苦を忘れて大いに楽しもうとする。

去年の霜が降ったところに刈った荻で、

蚕を飼うための簾を編んで今年の市で売る。



糸を繰るための瓢ひょうや土釜つちがまを作つて並なべておくと、

金や絹なんかよりも争あつて買かい求もとめられる。

君も私も童子どうしだつた昔は、

勉強をほつたらかしにして市へとすつ飛とんで行いつたものだ。

市の商人は巧たくまみな知ち恵えを働はたらかせ、

その口数の多おほさに、農家の人々はたいていだまされてしまう。

君の詩が来てそのころを思い出し、

故郷を離はなれている悲かなしさよりも、

それだけの歳月が流ながれてしまつた悲かなしさの方が、むしろ大きいのだと知しつた。

——えーと、今夜は出でさずにおおこうと思おもつていたんだけど、ここでむずむずして

きちちゃったんで、やっぱジョン・クレアの詩を一つだけ持ち出してもいいかなあ。

ジョン・クレアはずっと貧乏暮らしで、詩人として成功したわけでもなく、晩年はずっと精神病院で過ごす必要があればならなかったんで、幸せな人生であったとはとても言いにくいんだけど、少年時代は幸福だったと何度も回想しているんだよ。もう二十歳前から回想が始まるんだ。逆に言うと、そのころから強い悲哀を感じていたってことになるんだろうけど。

たとえばこんな感じ。

その緑の丘また丘を、ぼくは何度も散歩した。

子ども時代の幸せなときのことだ。

木陰にそって歩き、幾たびも鳥の巣を探し、

たくさんの花々を集めたものだ。

そこではしばしば遊び友だちと合流し

新たな遊びを考え出した。

しかし今では、年月の重なりがこの子どもたちを

大人という偽金にせかねじみたものに変えてしまった。

(森松健介訳、62ページ)

① この詩は、故郷のみどりが開発によって消されてしまった痛みには、幸せであ

った少年時代が遠くに去った痛みを重ねて歌ったものではなかったでしょうか。

——トバー君、この詩を知ってたの？

ジョン・クレアっていう人は、故郷が破壊されて行くことは、すなわち世界が破壊されて行くことであると感じていたみたいなんだ。そのような不可逆過程のうちには自分はいるといふ感覚でいたから、精神を病むほど苦しみが強かったんだろうね。地球環境が破壊され、生物多様性が失われ、もう決してもとにはもどれない時代にいるボクらが読むと、身につまされるところがあるんだよなあ。

㊦ ジョン・クレアのこの詩に特に注意を向けるあなたには、回顧する幸せな幼少の日々があつたでしょうか。

——ボクへの質問かあ。たぶん、よく覚えていないころにはそれなりのものがあったんだろうね。どっかに壁みたいなのがあつて、そこには行けないような感

覚があるんだ。うまく言えないけど。そのあたりのことは、トーバー君の真似じやないけど、またいつかの機会ってことかな。

で、トーバー君の詩にもどると、最初のところの「蜀の人間は」って並べたところがよくわかんないかも。理系っぽいトーバー君にしてはぜんぜん論理的でないもの。だって、蜀の人間は働き者なのか遊び好きなのか、どっちかわかんない。

前に、船の旅の途中で、平地の人は蜀の人に比べて怠け者だって言ってたよね。

それと、千人が働けば万人が食えるっていうのはホント？　いまの日本だと一次産業で働く人は5パーセント以下らしいけど、それでも食べるものがいっぱいあふれているのは、昔と比べて生産効率が上がったのと、食糧の半分以上を輸入しているからなんだよね。昔の中国で、9割の人が遊んでいられたってことはないと思うんだけど。

㊦ 一つ目のご指摘は、言われてみれば、筋が通らないですね。ときとして私は、矛盾するようなことを平気で並べたりしているのか知れません。容易な理解をあえて妨げようとしているのかも知れません。

それで思い出すと、例えばこのような作品も一例になるでしょうか。これは詩ではなくて詞ツです。

聞いていただく前に楊花ようかの説明をしておきましょう。楊ようは訓読みだと「やなぎ」ですが、枝垂れ柳の「やなぎ」とは異なります。楊の枝は垂れません。楊は春に花を咲かせ、白い綿毛のついた種子を飛ばします。大きな牡丹雪のようにふわふわと舞い、それを柳絮りゅうじよといって、その光景を詠んだ詩や詞がたくさんあります。ある人が楊花を詠んだ詞に和したのが次の詞です。

いったいそなたは何もの？

花に似たもの？ 花にはあらざるものに似たもの？

落ちたら落ちたで、だれもそなたを惜しみはしません。

すみかをなげうって出て行く路の辺、

そこにきつとあるのでしょうか、確かな思い？

情じょうはなくても思しいはあります。

きりきりとねじりあげる人のはらわた、

疲れ果てたあだな眼差し、

開こうとしてまた閉じるのです。

万里の彼方へと風とともに行く夢、

尋ね行くのは誰かのところ、

でも目覚めなさいと鶯に起こされるのです。

飛び尽くしたところで恨まれもしないそなた、

恨まれるのは庭の西のくれないの花、

落ちてもう枝にはつなげません。

朝とともに過ぎ去った雨、

そなたのなごりはどこ？

もしかして池一面にあるあの浮草？

三つに分かれた春の色、

二つはすでに塵と土、



一つは水となって流れました。

いま一度じっと見みつめる浮草、

ああこれはそなたではなかった、

点々とあるのはひとしづくすつの私の涙です。

——これはどういう作品？　いままで聞かせてもらったのはかなり違うよね。

象徴詩？　対象を明確化するのをわざと避けた？

ⓧ 言葉では言い表しようがないから詞に託したと理解していただけたらいいのかもしれない。それを説明しようとしたら、完全に取り逃がしてしまうことでしょう。

もう一つのご指摘、千人が働けば万人が食えるというのは、1人に働かせて10人が楽をしようとしたら世の中は飢えから免れられないという有名な命題を逆転させたものです。中国に限らずその昔は生産基盤が農業で、社会の構成員の大多数が農業に従事することで社会が成り立っていました。支配者階級が安逸に流れ、他人が生産したものに依存する者がいたずらに増えると、社会矛盾が顕在化して社会は崩壊に向かいます。

この誰もが知る命題をあえてひっくり返したのは、実際の宋の社会は、人民のほとんどすべてを農民として土地に縛りつけておかなければ成り立たないということではすでになくなっていて、とりわけ我が蜀ではそうだと、言いたかったからです。蜀は先進的であると、例によって郷土自慢でもありますが、商人の出身である私には普通に見えていることでも、伝統的な農本主義の考えに捉われてい

た人たちには必ずしも明らかではなかったのです。固定的な見方を少しばかり揺さぶってみようとしたのです。

——経済のことはよくわかんないけど、モノを生産するのが経済の土台だという見方は強いよね。昔はモノの生産といえば農業だったんだろうね。介護のようなモノを生産しない仕事は、経済成長に貢献するところがないというか、むしろ社会の重荷になっていると言われたりもするよね。それってどうなんだろうなあ。

Ⓣ 私の気分は陽気がよくなって一時期よりは持ち直したのですが、二月にまた逆戻りとなってしまうました。宋知事から、近く鳳翔を去ることになると内々に聞かされ、かなりの衝撃を受けました。

宋知事は私のことをあくまでも気遣ってくださり、町から外に出て春の陽光をたっぷり浴びてきたらよかろうと、近隣のいくつかの村を巡る任務を授けてくださいました。実際に春の野を歩くとずいぶんと気が晴れやかになったものです。それでも、ある町で斯飛閣しひかくという高い建物に登って詠んだのはこのような詩でした。

ここより西南には故郷へと帰って行ける道がある。

欄干に寄せる我が身から、

するりと魂が抜け出て、

寂しげなその道をたどって行こうとする。

我が魂が飛んで出たら、もう二度と戻っては来ない。

野はあくまでも広く、天はあくまでも長い。

牛や馬は雁や鴨とともに空を飛ぶように見え、

雲の峰は樹木とともに野に生えているように見える。

山の麓は水の気配を帯び、春の風が麦の苗を揺り動かす。

農事や漁労に携わらずに、

官職を愛して軽々しく故国を去り、

老いの日々まで帰らずに過ごそうとしているのはいったい誰なのか。

南の山を見ると、その先にある故郷を思います。これより八年前に、私は父に連れられて科挙の試験を受けるために都に行きました。そのとき、南に見る山を越えて初めて蜀の地を出て、鳳翔府のあたりを通ったのでした。山は故郷を隔て、

そして時間を隔てるものなのです。

この町には、昨年のほぼ同じ時期に、囚人の刑を軽くするために来ていました。あれからわずか1年で、自分の気持ちが大きく違ってしまったことに驚かされ、詩を詠んで弟に送りました。

去年ここに来たとき、

柳が芽をふいて春の巡りを報じてくれた。

今日ここに来ると、

柳の花は緑の苔の上に落ちていた。

川のはとりの堂に一人でまた泊まった。

重ねてここに来るまでに何があったのか。

琴を弾こうとしても、吹き来る風に音が止まってしまふ。

杯を手にしても、さしくる月の光に酔いが醒めてしまふ。

このようなもの憂い私であるから、

新しい詩を求める君の期待にはしばらく応えられずにいた。

この詩はこれまでの負債を弁じてくれるだろうか。

——5月病がまだまだ長引いて、いまならカウンセリングを受けたらどうかって勧められたりするだろうね。詩で訴えているのを聞くと、弟さんがカウンセラー役だったってことかな。



弟は終生のカウンセラーだったと言ってよいでしょう。弟と初めて離れたの

が5月病になった最も大きな要因であったのかも知れません。

私が送った詩に対して、弟からは寒食かんしょくの詩が送られてきました。古い中国において、春の行事で最も重んじられていたのが寒食節せいめいと清明節せいめいでした。冬至から105日目じつが寒食節で、その日は一切の火気を使わないで、冷たい食事をとりました。その翌日あつが清明節で、人々は郊外の墓に詣でて、先祖とともに大いにご馳走ちしうを食べて楽しみました。清明節は、宋の社会が豊かになるにつれて盛大に行われるようになり、北宋の終わりのころの都の清明節のありさまを描いたのがかの『清明上河図』せいめいじょうがずです。張拙端ちやうたくたんが描いた中国の至宝といふべき絵巻物を、あなたもご存知でしょうか。数年前に日本で公開されて、その価値が広く知られるようになったのですが。



——えーと、町のようすとか、人々のにぎわいとか、細かく描き込まれた絵だね。ボクの叔父さんが上野まで見に行っただけど、寒空のもとで何時間も外で待たされたって聞いて、そこまでして見ようとは思わなかったね。

㊦ 弟の詩に和して返したのが次の詩です。

今年の寒食は二月の晦日だった。

緑深い樹林に春の霞がまといつくようになったので、

郊外を巡るのにいい駿馬を誰かが貸してくれたら、

意のままにいたるところの名園を見てまわりたいと思った。

とはいえ、何やら物憂いのはそのまま、

酒は飲むことは飲んでも、杯を重ねるほどでなく、

詩は作ることは作っても、紙に記すほどでない。

ときに、もず 鴟の声がしたのに私は驚かされた。

鴟という鳥は、七月に、農作業に励めよと人に鳴きかける鳥だ。

季節はずれのその声に、

故郷の川のほとりの農地が荒れ果てないよう、

いまは誰が耕しているのだらうかと、

私の心はちくんと痛んだ。

——春って、いい季節なんだらうけど、季節の進み方が速すぎて、それにうまくついて行けないと、なんか取り残されたような感じがして結構つらかったりする

だよなあ。故郷の農地を思うつていうのは、自分のやるべきことができていないつていう焦りの表れだろうね。

㊦ 春の終わりの3月29日、私ばかりでなく、多くの人々の気持ちを重くさせしに出来事がありました。皇帝が亡くなったのです。

近年の書物では皇帝の本名をそのまま記すことも多くなりましたが、昔の間人である私は皇帝を本名でお呼びすることにはいまなお抵抗があります。皇帝が亡くなった後には廟号でお呼びするのが普通で、時の皇帝は仁宗じんそうと申し上げます。

仁宗皇帝の在位は42年の長きにわたり、私はこのとき数えで28歳でしたから、生まれてからすべての時間を仁宗皇帝のもとで過ごしたのです。一つの時代が終わったのかと、深い感慨がありました。

——ボクはぎりぎり昭和の生まれで、昭和が終わったときにどうだったのかっていうのはよく知らないんだけど、戦争を体験したような人たちにとって、昭和天皇の死は大きかったらしいね。トバー君の時代だと、皇帝の存在感っていうのはものすごいものがあつたんだらうから、思うところはいろいろあつて、それを詠んだ詩とかたくさんあつたんだらうね。

Ⓣ いえ、一首もありません。それどころか、自分の思いを口にしたこともありませんでした。皇帝は絶対至高でありましたから、個人的な感想を外に出すのは憚られたのです。さすがの私も蠅を吐き出すわけにはいきませんでした。

——皇帝が亡くなった悲しみを蠅だと言ったら、大問題なんじゃないの。当時は言えなくても、いま振り返って、その皇帝はどういう人だったと思っっているかなあ？

㊦ 私は仁宗皇帝のおかげで科挙にも制科にも合格させていただきましたので、後知恵で何やら評論めいたことを言うのは控えたいと思います。そういったことは歴史家に任せます。

——試験に合格した恩を900年以上経っても感じてるってことか。でも、いまの言い回しから推測するに、あまり高い評価ではないってことかな？ そうなのかって尋ねても答えてはくれないよね。

いま日本では天皇の退位が議論されているけど、それでも平成はまだ28年なんだよね。42年も皇帝をやっていたら、そろそろ退位とか譲位とかって話はなかったのかなあ？

㊦ 仁宗皇帝は幼いときに即位したので、亡くなったときにはまだ54歳でした。生前退位とかを検討しなければならないようなことはなかったのですが、仁宗皇帝には男児がなかったために、後継者問題がずっと懸案事項としてありました。皇帝はその問題に触れるのを極度に嫌い、47歳のときに大病をしても一切の検討を許しませんでした。それくらいの年齢になればいまから直系の男児が生まれる可能性は低いわけですから、皇族の中から後継者にふさわしい人物を選ぶべきなのですが、皇帝は非常にかたくなで、後継者不在のままに一年また一年と時が

過ぎて行ったのでした。

——大病って、なんだったの？

Ⓣ いままでいう脳梗塞だったのでしよう。元旦の儀式の最中に発作が起きました。皇帝は裸足で宮中の庭に立って天に祈りを捧げていたのですが、不意に体が傾き、左右の者があわてて支えると、意識が途切れ、口から涎が流れ出ていました。大晦日の夜に雪が降り、夜明けごろに晴れ上がって冷え込みが厳しく、雪の積もる上に裸足で立ったために、血管が収縮して脳梗塞を起こしたと推測されます。少し経つうちに皇帝はもと通りになったので、儀式は続行されました。

——軽い脳梗塞だったんだらうね。自然に回復しても、いまなら脳のCTを撮って、どこが詰まったのかを調べ、血液をさらさらにする薬を飲むとかして、次の発作が起こらないようにするだらうね。

Ⓣ 短期間のうちに小刻みに何回か発作が繰り返され、体の一部が麻痺し、言語機能も損なわれ、首を動かしてかろうじて意思表示をするという状態にまでなつてしまいました。しかし、幸いも徐々に回復して、皇帝としての勤めを果たせるところにまでもどったのでした。

——へーえ、リハビリとかしなくても、もどったんだ。人間の自然治癒力ってすごいんだね。



㊦ どうにか病気は乗り越えられたのですが、後継者がいないままに万一のことになれば大混乱に陥りかねないと、宰相以下の人々は危機感を募らせました。しかし、皇帝は依然として後継者を検討することを許さず、その陰で、秘かに丹薬たんやくの服用を始めました。丹薬というのはいわゆる不老長生の薬です。皇帝はそれによって病を断ち、あわよくば男児を儲けることも期待していたのでしよう。容易に想像がつくように、丹薬は全く逆の効果をもたらし、皇帝の健康は年々損なわれて行ったのでした。

—— 脳梗塞の持病がある上に、ヘンな薬を飲んだら、そりゃ、だめだよね。それで54歳で亡くなったんだ。

Ⓣ 皇帝の様子を見て、スーパースターの1人の韓琦かんきはもはや猶予はならないと、伝え聞くところではかなり強引なやり方で、皇帝の従兄弟の息子を後継者に指名するという決断を皇帝の口から引き出しました。やっと皇太子が決まって半年ほどで皇帝はまたも発作を起こし、とうとう亡くなってしまいました。ぎりぎりのところで間に合い、さすがスーパースターということであつたのですが、強引さが思いもよらぬ事態を次々に引き起こすことになったのでした。

鳳翔での私の日々とは直接関わりがないことなので、短くまとめてお話しておきましよう。

新たに皇帝になったのは廟号でお呼びするところの英宗皇帝えいそうです。優れた知性の持ち主であることから皇太子に選ばれ、仁宗皇帝もこの人ならと納得したので

した。韓琦は英邁な新皇帝のもとで、「手本は范仲淹」が成し遂げられなかった国政の大改革を行おうと考えていました。

英宗本人には実は皇帝になりたいなどという気は毛筋ほどもなく、自分が皇太子に指名されそうだと知ると、奇怪な振る舞いに及んで何とか逃れようとしてしました。しかし、皇帝が一度決めてしまった決して覆らないので、仕方なく皇太子になり、そしてとうとう即位しなければならぬときが来ました。これが最後のチャンスと、捨て身の逃亡を企てました。宮殿から走って脱出しようとしたのです。それは許されるはずもなく、人々に取り抑えられ、無理やり即位の儀をやらされて皇帝になりました。すると、「朕はこれより3年の喪に服す。政治は韓琦ら重臣がよきにはからえ」と宣言して宮中の奥に引っ込んでしまいました。韓琦は、皇帝が喪に服して国政を停滞させた例は過去にないと皇帝を説得しようとしてしました。

皇帝は「朕は病氣である」と、理由を変えて宮中の奥から出ようとしませんでした。

——へーえ、なんかおもしろいなあ。ボクは断固としてその皇帝を応援したいな。優れた知性の持ち主なら、当然、皇帝なんてアホくさいってすぐにわかるもの。まわりが勝手に事を進めて、逃れられないようにしてしまえば観念するだろうってことだったんだらうけど、そういうのってむかつくよね。

㊦ 皇帝が引きこもったままでは国政が止まってしまうので、皇帝制度における

常套手段として、韓琦らは皇太后こうたいごうを担ぎ出しました。皇太后とは皇帝の母です。

仁宗皇帝の妻であった元の皇后は、新たな皇帝とは血縁関係はありませんけれど、

立場としては新皇帝の母、皇太后でありました。子は母に従うという建て前から、皇帝が幼いときや不調の場合には、皇太后の決定をもって国家の最終決定とするということがしばしば行われました。

韓琦としては、ほんの一時期だけ形式的に皇太后を上戴く心積もりであったのでしよう。ところが、皇太后は自らの意志で政権を運営しようとの意欲を見せ始め、ちよつとややこしいことになってしまいました。宮中には新皇帝派と皇太后派ができて対立し、韓琦の強引さを批判する人々も出てきて、事態は混沌としてきました。英宗は賢い人でしたから、ここに至って自分がきちんとしなければならぬと考え、皇帝としての任務を果たす意志を固めたのです。それを受け韓琦は剛腕を振るい、自分で担ぎ出した皇太后から強引に全ての権力を奪い取ったのでした。

——韓琦っていう人が一人ではたばたしたって感じだけど、権力を巡るごたごた  
って、当事者にとっては一大事なんだろうけど、なんか下らないよね。

㊦ 国政の大改革という目標がなければ、つまらないごたごたでありましょう。  
英宗皇帝の地位が安定するのを待って、韓琦や欧陽脩がリーダーシップを執って  
国政の改革に乗り出そうとしました。思い出してください、私が郷里の寺子屋で  
スーパースターの名を聞いたのは8歳のときでした。それから20年を経てつい  
に改革が始まろうとしたのです。

ところが、ここに奇妙な問題が生じて、韓琦のシナリオは崩壊し、往年のスー  
パースターは当事者能力を失って、国政の大改革はまたしても絵に描いた餅に終

わったのでした。その上、英宗皇帝は精神を擦り減らして本当の病気になる、在位わずかに4年でこの世を去ったのでした。

——奇妙な問題って、どんなことだったの？

㊦ これを話すときつと笑われてしまうでしょう。しかし、当時としてはまさしく命懸けの論争で、死の床にあっても論敵を罵り続けた人さえいました。真剣に議論されたということだけはぜひ理解していただきたいと思います。

私たちの後の明の時代みんの人々は、宋の人間はどうでもいい議論にうつつを抜かし、肝心のやるべきことを少しもしなかった口先だけの連中だ、手厳しく批判しました。その典型例がこのときの大論争でした。

ここで声を大にして言っておきたいことがあります。議論できることがいかにすばらしいかということ。権力を持った者が何かをつぶやいて即座に実行されるのと、権力を持たない者が公に議論する自由が保証されているのと、いったいどちらがいいのでしょうか。

——ホントに声が大きくなったよ。トバー君って、ときどき妙なところで熱くなるんだよね。いまのは、どっかの国で今度大統領になる人を意識しているんだらうけど、こんな田舎の飲み屋でぼやいたって仕方ないでしょうに。

㊦ 我らを悪しき手本と見た明の人々は、即断速攻が可能になるよう皇帝の権力を強めました。四の五の言おうとしたら直ちに処罰され、明の時代に処刑された



官僚とその一族の数はおそらくあらゆる時代を通して最も多かつたでしょう。明の初代皇帝は一度の肅清で3万人を処刑したこともありました。私は海南島に流されましたが、いくら蠅を吐き続けても殺されはしませんでした。

私たちはときに不毛とも見える議論に終始したことがあつたにしても、己の考えを堂々と公言できたという点で、中国史上最も優れた時代であつたと胸を張ることができます。中国史上というなかには現在の中国も入れてもよろしいでしょう。

理想を説くばかりで実行力がないとの批判が、どうして説得力あるものとして受け止められるのか、私には残念でなりません。理想なくして実行される恐ろしさを人類はどれほど経験してきたかを真剣に省みるべきです。私たちの時代の問題は、自由な議論にあつたのではなく、議論を終息させる手段を整備しようと真

剣に努力しなかったことにありました。国家意思の最終的な決定は皇帝に委ねられ、それは天意に通じるとの考えが強固にあつて、それ以外の意思決定の方式を誰も検討しようとしませんでした。議会制民主主義のようなものを醸成する基盤がなかったのです。皇帝が意思表示をためらえば、議論は延々と続きました。議論が熟す前に皇帝が意思表示を急ぐと、議論は蒸し返されてごたごたが続きました。そのときに、皇帝の決定を直接批判することは許されないのです、少し筋をずらしての論戦となり、本質から離れてただ相手をやりこめるためだけの議論ということになりかねませんでした。

英宗皇帝のときに何が論点だったかを簡単に説明します。英宗皇帝は仁宗皇帝の従兄弟の子でした。英宗皇帝は仁宗皇帝の皇太子になって、仁宗皇帝が父、英宗皇帝はその子ということになりました。仁宗皇帝が亡くなると、英宗皇帝は仁

宗皇帝の祭祀を、皇帝の父の祭祀という形式で行いました。では、英宗皇帝のもともとの父の祭祀は、いかなる形式で行うのがよいのかというのが問題となったのです。英宗皇帝のもともとの父はすでに亡くなっていて、皇太子になる前は、当たり前のように、子が父を祀る形式で祭祀を行っていました。しかし、英宗皇帝にはいまや仁宗皇帝という父がいて、2人を同じ形式で祀るわけにはいきませ

ん。

若干の論議を経て、韓琦や欧陽脩ら執行部は、皇帝の親という形式で祭祀を行えばよいとの結論を出しました。「父」と「親」なら並立可能だということでした。それに対して若手官僚は、英宗の父はもはや仁宗になったのだから、もともとの父は皇帝の伯父という形式で祀るべきだと主張しました。執行部は自分の父を伯父と呼ぶのはおかしいと反論しました。父か伯父かはたまた親か、さまざま古

典から根拠となりそうなことを引つ張ってきてそれぞれに自分が正しいと主張し、多数の人々を巻き込んだいつ果てるとも知れぬ大論争へと発展したのです。

——なんかわかんないけど、笑っちゃうというよりは、そんなことでよく議論できたって、むしろ感心しちゃうかも。いま生前退位が議論されているけど、それだって真面目くさってやってんのを見て、「なんすか？」ってボクなんかは思っちゃうよ。どうだっていいことを、どうだっていいことを土台にして議論していて、要するにシャボン玉にシャボン玉を乗せるっていうか、マジでむなしくないって感じ。そんなことでシャカリキになられたらこわいよね。



英宗皇帝も恐ろしく思ったのでしょう。自身の父に関するものでいつ果てる

とも知れない大激論になったのを見て心を痛め、次第に神経を病み、そして身体も病んでしまったのでした。

——賢くて繊細だったんだらうね。皇帝なんかになりたくなかったのに、こんなことになって大迷惑だよ。その皇帝をボクは断固として支持する。いまさら遅いけど。

㊦ 仁宗皇帝が亡くなって夏は暗く重く始まり、さらに宋知事が鳳翔から去って私は唯一の理解者と頼む人を失って一段と気落ちし、そして6月に新しい知事が赴任してきました。陳希亮ちんきりょうといひます。ひと言でいって厳格無比の人でありました。その新知事のもとで私はうまくやって行けたでしょうか。どう思いますか？

——ここまでの話の流れで言うと、「心事恐らくは蹉跎せん」という予感が当たってことになるのかな。いよいよここからがおもしろいというところで、今夜はこれであってことかな。

㊦ もう少し盛り上げておきましょう。今年は大ぶんこれで終わりになるでしょうから。

陳知事は到着すると、ただちに鳳翔府に勤める吏人を招集し、

「諸君にまず言っておく。諸君は今日までぬるま湯に浸かっていた。それも今日で終わりだ。明日からは熱湯になるか氷水になるか、それは諸君次第だ。よいか、わしの目からは誰も逃れられない。誰一人としてだ。諸君がどこで何をしている

か、今後わしはその一切を知り、熱湯か氷水の中に放り込むであろう。まさかここには目が届くまいと期待するのは無駄だとすぐに思い知る」

そう宣告してから、鳳翔府の事情について幾つかを幾人かの吏人に尋ね、

「早速偽りを申した者がいた。わしは知っているがいまだけは許す。次はもう許さない。では、諸君の上に立つ者について尋ねたい。最初に蘇軾とはいかなる者なのか、諸君の見て知るところを率直に言うがいい」

そのように問われ、一同は顔を伏せました。吏人と官員との間には厳然たる身分の差があります。新知事がどのような意図で尋ねているのかわからず、しかも前知事とは打って変って恐ろしげな様子に、誰もが答えようとしませんでした。

陳知事はぎろりを目を光らせ、1人を指差し、

「この場にはわしと諸君しかいない。包み隠さず言うがいい。率直にだ。黙った

ままでいると容赦をせぬぞ」

陳知事は一本の杖を手にすると、床を強く叩きました。杖というのは刑罰に使うためのお仕置きの棒です。「容赦をせぬ」とは端的に言つてそれで打つことを意味します。知事には吏人に刑罰を与える権限があり、即座に執行できます。宋知事は吏人を自ら杖で打つたことも、打てと命じたこともありませんでした。

指名された者は震える声で、

「あの方は制科に合格されたまことに賢いお方にございます。鳳翔にこられましたてよりご立派にお仕事をなさつておられます」

それを聞いて陳知事が次にどうしたか、あなたに推測していただきましようか。

——下の者としてはそのように答えるしかないよね。まさか、それでお仕置きさ



れたんじやたまんないよなあ。

㊦ 陳知事は、

「偽りを申したら次は許さないと言ったのを聞かなかったのか」

杖の一撃で吏人は床に崩れました。

「わしを欺けないということがこれでわかったであろう」

陳知事が吏人を打ったことはたちまち役所内に知れ渡り、私の耳にも入ってきました。

どうです、この先を聞きたくなつたでしょう。

——盛り上げてくれましたねえ。切れ場としてサイコーじゃん。

新しい知事は厳格無比って言ってたけど、滅茶苦茶ないばりんぼさんだったってこと？ 制科に合格したトバー君みたいなエリートを嫌悪する叩き上げの人だった？

㊦ 陳知事がどのような人だったのか、その伝記を最後に聞いておいていただきましょうか。宋代の官人が一般的にどのような生涯を送ったのかということもおわかりになるでしょう。官人の伝記の通例として、陳知事のことを公こうと呼びます。

公いみぎの諱きりょうは希亮、字あきなは公弼、眉州青神びしゅうせいしんの出身。先祖は京兆けいちようの人で、唐こうめいの広明年間に初めて眉州びに移った。曾祖父は延祿えんろく、祖父は瓊けい、父は顛忠けんちゆう、みな官に仕えることはなかった。

これが伝記の書き出しの典型です。これでおわかりのように、陳知事は私と同郷人でした。我が父とも面識があり、宋知事がいなくなっても、陳知事も同じようによくしてくださるのではないか、私は甘い期待を少しばかり抱いていました。吏人を打った一撃でそれはいっぺんに砕かれたのでした。

公は幼くして父を喪い、学問を好み、十六歳のときにきちんとした師について学びたい考えた。公の兄は思案の末に学資として三十万錢余りを公に貸すことにした。公は錢を受け取ると証文を焼き捨て、町を離れて師のもとに入門した。公は学問を習得すると家に帰り、兄の子に学問を教えた。天聖八年、公は兄の子とともに科挙に合格した。これより町の人は公の家のある一角を三雋坊と呼ぶよう

さんしゅんぼう

になった。三人の雋すくれた者がここから出たからだ。

公の最初の任地は長沙ちやうさ県だった。そこには海印国師という仏僧がいて、土地の貴人たちと交わり、あくどいもうけをしていた。人々は海印国師を恐れ、その顔をまともに見ることもできなかった。公は法をもってその僧を捕え、長沙県の人々は公を畏れた。

次いで零都うとに行く、そこでは老練な吏人が銭次第で裁判を左右していた。吏人は公がまだ若いのを見て与しやすいと思った。公はいきなりその吏人に重罪を宣告した。吏人は血が流れ出るまで額を地面に打ち付け、「必ず身を改めます」と詫わびた。公は教え諭して後に釈放した。公は町の文化水準を高めるために学校を建てた。釈放された吏人は家財を売って学校建設のための資金を提供し、自分の子弟を入学させた。後にみなよい吏人になり、科挙を受けた者もいた。

この地にはたくさんまじない師がいて、春になると鬼を祭るためだと言って民衆から銭を集めていた。民間には、赤い衣を着た火の神様、「緋衣老人」ひいろろうじんがいるとの言い伝えがあり、まじない師はそれをきちんとお祭りしないと火災がおこると脅していた。公はその祭りを禁じたが火災はおこらなかった。公は、火の神様以外にもあやしげな神が祀られている数百の祠を壊し、七十余人のまじない師を追放した。村の老人は「出て行かないでくれ」とまじない師を引き止めようとした。まじない師は泣いて「陳公がわしらを捨てるのだ。わしらがいなくなれば緋衣老人がまた出てくるだろう」と言った。

公は、母が老いたので故郷の近くに帰りたいと願い出て蜀の劍州けんしゅうに移り、次いで母が亡くなり、喪のために官職から去った。喪が明けると、都で職を得た。

都の福勝塔ふくしょうとうが火事で焼け、国は再建のための費用を用意した。このとき、西方

で趙元昊が宋との間に紛争を起こしていたので、その費用は軍の食糧にあてるべきである。公は主張し、塔の再建はとりやめになった。

これより先、趙元昊がまだ宋と事を構える前に、青州の趙禹は、趙元昊はきつと反乱を起こすであろうから警戒するようにと朝廷に申し上げていた。宰相はそのようなでたらめを言うなど、趙禹をよその土地に追放した。趙元昊が実際に反したので、趙禹は上京して「自分は正しいことを言った」と訴えた。宰相は怒って趙禹を獄に下した。公は「趙禹に罪はなく、むしろ称賛すべきです」と、宰相と争った。皇帝は公の主張を認め、趙禹は徐州に榮転となった。

皇帝はそのような公を見て、官員の罪を裁く御史に抜擢しようとした。たまたま公の外戚の沈氏の子が強盗殺人の疑いで捕えられて獄中に置かれ、まだ己の罪を認めずにいた。公はその者から直接に実情を聞こうとして獄を尋ね、第一問を

発すると、その者は恐れのみならずその場で死んでしまった。沈氏は公が息子を殺したと訴えた。公および獄の役人が取り調べの対象となった。公は「あの悪者は自分一人が殺した」と、自ら罪を被って罷免となった。

都の西で盗賊が村を襲って役人を殺した。盗賊の勢いはさかんで、房州が次の標的になりそうだった。富弼ふひつの推薦で公が房州知事に任命された。公が赴任すると、房州には兵備がなく、民衆は盗賊を恐れて次々に逃げ出していた。公は役場の雑役係や民間人や囚人から数百人を集めて日夜軍事訓練をし、その号令があたり響いた。それを聞いて民衆は安堵し、盗賊も房州には近づかなかった。

雷甲らいこうという者が朝廷から派遣されてその盗賊の征伐に乗り出した。しかし、雷甲には兵士を統率する力量がなく、兵士は至るところで悪さをした。それがために、また別の大盗賊が房州に近づいてきているとの報せが公のもとに入った。公

は人々を率いて、その盗賊と川をはさんで対峙した。公は「じっとしたままで動くな」と人々に命じ、一人だけ前に進み出た。新たな盗賊は雷甲で、雷甲は目の前の相手が盗賊であると誤認して公に向かって矢を放った。公は動かず、ほかの人々もまったく動かなかつたので、雷甲は人形ではないかと疑った。馬から降りて様子をさぐり、ようやく公であると知った。雷甲は地に伏し、「官軍であることを知らなかつたのです」と詫びた。人々は雷甲を切るべきだと言ったが、公は民に對して暴虐を為した者十余人だけを捕え、その他の者は許し、「盗賊と戦って己の罪を贖え」と雷甲を放った。

ここに党軍子とうぐんしなる賊の勢いがさかんになった。崔德贇さいとくひんがそれを捕えようとして逃がしてしまった。そこで、崔德贇は、党軍子が一度居座つたことのある向氏しょうしという者の屋敷を囲み、その父子三人を殺して、これぞまさしく党軍子であると



偽って、その首をさらしものにした。公はまやかしであるの見抜き、崔德贇を獄に下した。崔德贇は白状しなかったが、党軍子本人が別のところで捕まった。国は向氏に絹を贈り、その冤罪を晴らし、家の名誉を回復させ、崔德贇を流罪にした。

ある者が、華州かしゅうの張元ちやうげんが西方の趙元昊に仕えようと逃亡したと訴え出た。張元ちやうげんの一族百余人が捕えられ、房州で取り調べることになった。百余人は嚴重に監視されて房州に連れて行かれた。飢えと寒さのために途中の道でいまにも死にそうになった。公は「張元が趙元昊のもとに走ったどうかさえまだわかっていない。もしそれが本当だとしたら、張元は家を棄てて行ったわけだから、親類一族に罪はない」と考え、お上の意向を秘かに聞いた上で、これらの人々を釈放した。皆は泣いて感謝し、公の画を描いて祠におさめた。いまに至っても公を祀るのを絶

やさずにいる。

公を中央で用いようとする声が上がった。しかし、「地方での実践こそが私の願うところですよ」と言って、公は宿州しゅうくしゅうの知事になった。宿州には汴河べんがが流れ、そこに架かる橋が舟運の邪魔になるといっているので、水に生きる者と陸に生きる者との間で論争が絶えなかった。そこで公は初めて飛橋ひきょうというものを造った。飛橋は高く大きな弧を描いて川をまたぎ、橋を支える柱を河中に立てることもないので、船の航行のさまたげにならなくなった。それ以来、汴河にかかる橋はみな飛橋になった。

もしかして、眠くなつてしまいましたか。続けてあくびが出たようですが。

——えっ、そうだった？　ちゃんと聞いてたつもりだけど。ちょっと酔いがまわってきちゃったのかなあ。

㊦ 長すぎましたね。この伝記は、実は私がいろいろな資料を集めて書いたもので、つい力が入ってそっくり全部を話そうとしてしまいました。まだ半分くらいですが、これくらいにしておきましょう。陳知事がどのような人だったのか、およそのところはわかりただけでしたか。

——たしかに厳格で、かなりこわい人だったみたいだね。だって、親戚の人が獄中で一発で死んでしまったんだよね。トバー君は話を盛るのがお得意だから、それってホントかなって気もするけど、ホントならかなりのものだよな。

ⓧ 私が調べたところでは、陳公にひと言尋ねられただけで死んでしまったと記録されています。普通にはありえそうにないので、陳公が獄吏に手をまわして殺害したのではないかと疑われて、獄の役人も取り調べの対象となったのです。口封じをしたというわけです。陳公はやましいことがないのに嫌疑をかけられたのを恥じて職を辞したのでした。

——そんなにこわい人なら、絶対にありえないけど、この店に来たりしたら困るだろうね。一緒に飲もうとか誘われたら、逃げるしかない。

ⓧ 昔もその通りで、官僚仲間が集まってわいわいにぎやかにやっているところ

に陳公が現れると、一瞬にして人々の顔から笑みが消え、皆黙りこくったまま一人去り二人去りと、ついには誰もいなくなってしまうというのがしばしばだったといひます。陳公の顔は見るからに恐ろしげで、黒光りし、目は切れ上がって氷のように冷たい視線を放ち、雷のような声で人々の胆を震わせました。冗談めいたことは一切口にせず、官僚はいかにあるべきかとの持論を展開し、少しでも異議を唱えようものなら徹底的に言い返され、誰も陳公の隣になるのを嫌いました。もしもこの店に陳公が来られたならば、その日から客が寄りつかなくなつて閉店という事態になるやも知れませぬ。

——トバー君とはまるで違ふキャラだったんだ。そんな人が上司になつて、きつとんでもなくまづいことになつたんだらうね。毎日がバトル？

㊦ そこからは来年ということにして、今夜は、ちよつと早い年越しそばの代わりに、どうですか、ラーメンでも食べに行きませんか。

——いいね。じゃあ、どこにすつかな。新しく開店したところがあつてさ、値段は一流、味は三流って評判なんだけど、行ってみる？ いくら三流でも、あの極太千歳飴に負けることはきつとないんだらうけど。

㊦ 極太千歳飴ですか。あの味が無性になつかしくなったりしませんか。どうです、行ってみませんか。

\*

\*

\*

2人がこの後で実際にねずみ男のラーメン店に行ったかどうかは聞かなかった。だいたいそんな店が本当にあるのかもわからない。

冒頭のイノ君の啖呵はなかなかのものだった。仮にも蘇東坡だと名乗る人物に向かつてあれだけけげん言えるのはイノ君以外にはいないだろう。それだけイノ君とトバー君は信頼し合っているということなのだろう。

トバー君は何も弁解しなかったが、鳳翔に赴任した蘇東坡が民衆の生活に無関心であったというのはいりえないように思え、少しばかり調べてみた。鳳翔に着任したことを宰相に報告した短い文章が残っていて、地方官になった自分のいまの最大の関心事は、国家から課せられる任務のために民業が破壊されていることだと記している。

宋の時代には、農産物や銭で収める税のほかに、国家のために労働力を提供する<sup>ことも義務として</sup>負わされていた。例えば、都に木材を運んだり、前線の軍隊に食糧を運んだりするような大きな仕事は、裕福な農家に割り当てられた。もし輸送の途中で事故などがあって物資に欠損が生じた場合には弁償しなければならず、そのために破産する家も少なくなかった。とりわけ鳳翔のあたりは、郭<sup>かく</sup>綸の詩や陳公弼の伝記にあったように、西方で趙<sup>ちよう</sup>元昊<sup>げんこう</sup>が事を構えるようになってからは、西方の軍事行動のための補給基地となつて、民衆の負担が激増していた。鳳翔に赴任してすぐに蘇東坡は、自営農家はなはだ疲弊していることに気づき、その調査に乗り出した。そのことについてトーバー君は何も触れなかった。

トーバー君が何者であるのか依然として謎のままだ。それでも、その甲高い声にはいつの間か違和感がなくなり、時に蘇東坡その人が語っているかのように感



じてしまうことさえもある。もちろんそれはありえない。

蘇東坡が5月病になったというのは、それらしく聞えはしても、何か怪しい話だ。トーバー君の化けの皮をはがそうとすれば、その手がかりはいくらでもありそう。しかし、一枚皮をはがせばその下からまたトーバー君が出てきて、「おいそこそが本物の蘇東坡だ」と言いそうな気がする。はがしてもはがしてもトーバー君で、結局のところは蘇東坡の実像はどこにもないということになってしまうのだろうか。

イノ君とサイコロキヤラメルを使った賭けはしなかった。だから、文字起こしは結局いつも通り私が行った。その作業中に、どこかの市長が執務時間中に賭け麻雀をしていたことが問題になって辞職した。ウェブサイトに掲載するために2カ月間を使ってしまっても、賭け事をしたと非難されるよりはずっとましである。